
僕と私。

なつめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と私。

【Nコード】

N9245M

【作者名】

なつめ

【あらすじ】

ペットシヨップをこじんまりと経営する僕。ある日、来客がやってくる。「犬を買い取ってください」と彼女は言う。

富山で母と暮らす同性愛者の私。彼女の秘密を知るのは、親友のナオコだけ。

僕、はじまりのはじまり

彼女は閉店5分前にやってきた。控えめに空けられたドアから入った隙間風に僕は身震いをした。外では12月の雨粒が静かに地面を濡らしていた。

彼女は店内を義務的に見回してから僕のほうへと歩いてきた。そして小さな声で僕に言った。「このコを買い取ってください」

彼女の足元には、ビーグルが小さく座っていた。雨に濡れたそのからだは小刻みに震えている。

彼女は続けた。「どうしても手放さなきゃいけなくなってしまったんです」

「いや、でも…」と僕は答えた。「うちはペットショップなんで、買い取りはしてません」

「でも他に頼めそうな場所が思いつかないんです」と言っただけで彼女は頭を下げた。「お願いします」

彼女はしばらくの間、そのままの姿勢で下を向いていた。髪がかけてある彼女の左耳はイタリアの美術館にあるオブジェのようにみえた。

「理由を教えてもらってもいいですか？」

「手放さなきゃいけなくなっただんです」彼女は顔をあげて、同じ言葉を繰り返した。

僕は彼女の口から発せられるであろう次の言葉を待った。

彼女の年齢は三十歳くらいだろうか。うつすらと化粧をしている。それは自然に、そして上品に、ほのかな色味を彼女の肌に与えている。スカートの前で重ねられている手は、左耳とセットで彫られた芸術品のようだ。長いまつげが上下に何度か揺れた。とても上品なまばたきだ。全ての作業を放り出してでも、その仕草を眺めていた気持ちになる。彼女はもう一度まばたきをしてから、僕の目を見て言った。「お願いします」

僕は鼻で小さくため息をした。彼女にはどうしても犬を手放さなければいけない事情があり、そしておそらくペットシヨップに犬を持ちこむのは彼女にとって最後の手段だったはずだ。僕が断っても、彼女がなんらかの方法で犬を手放すことに変わりはないだろう。

僕はもう一度小さくため息をついてから言った。「もしよかったら、コーヒーでもどうです？ ちょうど2軒となりに喫茶店があるんで、少しだけ事情を聞かせてくれませんか」

私、ひみつ

私が自分の「特殊性」に気付いたのは16歳の夏、高校生活にも慣れ始めた7月の事だった。私があえて特殊性と呼ぶのは、それが世間一般においては、そう、特に日本においては、「かなり」がつかほどの少数派だからだ。

私が生まれたのは富山県。山に抱かれた美しい町だ。地震も少ないし、台風もこない。高校生にとってはいささか刺激に欠ける場所ではあるけれど、土着傾向が強いのもうなずける。立山の頂から流れる雪解け水は、やがてその姿を川へと変え日本海へと注ぐ。時間は河口の河流のようにゆるやかに、しかし着実に進むべき方向へ流れていく。

そこでは「受験戦争」と呼ばれるものは存在しない。せいぜい小競り合い程度。学生達は公立高校を目指して常識的に勉強する。私もそうだった。命を削るような覚悟で睡眠時間を割き、悪魔と戦うような剣幕でペンを動かすことは一度もなかった。1日8時間は確実に眠った。

高校入学時に平均よりも少しだけ低かった身長は高さを競うためのこのように伸びていった。大きく変化をとげる体にあわせるかのように、私の心に変化が起こった。いや、変化なんて生温いものではない。転換期、とも呼んだほうがいい。それは唐突にやってきた。まるで道路を杖で適当についたら温泉が湧き出てきたみたい

に。私はクラスメイトに対して特別な感情を抱いていることに気が付いた。思春期なんだからそんなことは当たり前だ、なんて思わないでもらいたい。私に通っていたのは女子高で、もちろん私も女の子

だった。そして私が恋心を抱いた彼女の名はユキナといった。そう、私は同性に恋をしたのだ。数学の授業に疲れた私は、片肘をつき左前に座るゆきなな白いうなじを見るともなく眺めていた。すると突然、体の中で何かがうまれたような感じがした。最初は微かなうずきのような感覚だった。しかしそれは次第に大きく、そして重たくなって、私の中に地響きのような震えを呼び起こした。それは何かを決定的に変えてしまった。私はユキナに恋をしていた。その発見は私を驚愕させ、体の芯を揺さぶった。ひんやりとした汗が体中から噴きだし、対照的に顔が熱くなるのがわかった。でも気付いた瞬間の衝撃が過ぎ去ってしまうと、後には事実だけが晴天にぽかりと浮かぶ孤陋の雲のように残った。

ユキナは姿勢のよい女の子だった。歩いているときも座っているときも背筋はぴんと伸びていた。彼女の頭はまるで空に浮かぶ星を指し示すかのように、天に向かっていつも固定されていた。色白の顔には大きな1対の漆黒の目がぽっかりと浮かんでいた。彼女と向かい合って話をしていると全てを見透かされているように感じるこゝとがあった。その視線は私が見につけている装備の全てを一瞬にして剥ぎ取ってしまう力を持っていた。

ユキナと私は友達として高校生活を過ごした。私は彼女への恋心を心の一番奥深くにしまいこみ、細心の注意を払いながらユキナを思い続けた。2年生になった時のクラス替えて別々のクラスになってしまふまでの毎日、私は暇をみつけては彼女のうなじを飽きもせず眺めていた。それは私をとても幸せな気分にくれた。冬になる頃には彼女のうなじを見るだけで多くがわかるようになっていた。彼女のうなじは彼女の体調や機嫌を実に正確に私に語りかけてきた。2年になってクラスが離れてからも私たちは仲のよい友人であり続けた。

私は自分が同性愛者であることを恥ずかしいと思つたことはない。私はどこまで行っても女性に恋をし続けるだろうし、男性に対して

性的な欲求を抱くことは決してないだろう。だからといって、私は自分の特殊性に関してオープンなわけではない。むしろ逆といってもいいくらいだ。私は頑なに自分の秘密を押し隠してきた。母親にも言っていない。父親は私が中学生の時に交通事故で死んでしまったので、打ち明けるチャンスすらなかった。父が生きていたからといって状況が変わるわけではないと思うが、女手一つで育ててくれた母親にむかって「私は同性愛者だから、結婚することも、子供を生むこともないと思うわ。残念だけど」なんて口にすることはできない。絶対にできない。

私の秘密を知る人物が一人だけいる。彼女の名前はナオコという。私たちは同じ高校に通っていた。クラスも部活も違っていたので、学校での接点は全くといっていいほどなかったが、犬の散歩中に偶然公園で出会わせ、それがきっかけで仲良くなった。学校でも話すようになり、犬の散歩にも一緒に出かけた。彼女はヨークシャー・テリーを、私はコリーを連れて公園で待ち合わせをし、井戸端会議でもするかのように最新の噂話などを三十分程話すのが私たちの日課になった。

ナオコは小柄で活発な子だった。そして何よりも幸せそうな子だった。彼女はよく笑った。その笑顔は、何か幸運な出来事を予言しているようにみえた。彼女の黒髪はいつも櫛をいれたばかりのように輝いていて、肩に届くか届かないかというところで、絶妙な曲線を描いて内側にカールしていた。それは達人が最高級の墨汁と筆を使っ書き上げた、カタカナの「ノ」のように見えた。彼女と公園で過ごす時間は私にとってかけがえのないものになっていた。他の何かで置きかえることはできない時間。それはナオコにとっても同じであつたはずだ。私にはそれがわかっていて。私は彼女を必要としていたし、彼女は私を必要としていた。だからといって私はナオコに恋をしていたわけでは決していない。私はあくまでも密かにユキナを想い、あくまでも静かに彼女のうなじを眺めていた。そして私とナオコはあくまでも友人であつて、その線を越えることは私の

望むところではなかった。

私がナオコに秘密を打ち明けたのは高校2年の秋だった。公園で初めて顔を合わせてから1年が過ぎようとしていた。紅葉の季節は終わり、色合いが抜けた公園は冬を静かに待つだけといった様相で、空はといえば蓋をかぶせたような雲がこれから始まる北陸の冬を静かに、それでいて決定的に暗示していた。私は覚悟を決めていた。

私は彼女に事実を、自分のありのままの姿を提示する義務があるし、ナオコはそれを知らなければいけない。いつもより長い時間をかけて公園に着いたとき、ナオコはいつものベンチに座っていた。砂を踏みしめる足音がいつもよりも乾いている気がする。ステツプに合わせて聞こえているはずの足音が、どこか遠くから聞こえてくる。ナオコはすぐに私に気付いて小さく笑う。私も小さく頷いて応じる。そして10センチほどの間を空けて隣に座る。

言うしかない。

「今日は聞いてほしいことがあるの」

私が話し終わるまでの間、ナオコは何も言わずに聞いていた。静かにまばたきをし、そして時々思い出したように小さく頷いた。それまで誰にも打ち明けたことがない事実。それは一旦私の口から発せられてしまうと他人事のようだ。次々と言葉が溢れてきた。どのくらい話していただろうか。布にインクが染み入るように、時間の感覚は意識の中に埋もれていった。十分かもしれないし、1時間かもしれない。途中で手袋を外したことを異様にはつきりと覚えていく。私は全てを話した。幾重にも包装された包みを剥がしていくように、1つ1つの事実をナオコに提示した。自分が同性しか愛せないという発見がいかに衝撃的な、しかし同時に自然な事実として私に訪れたのか。どれだけユキナのことを想って毎日をすごしているのか。ユキナのうなじを眺めた幸せの日々についても包み隠さずに

話した。私が全てを話し終わったとき世界がひとまわり小さくなった気がした。

しばらくの沈黙の後で、彼女は一つ大きく頷いた。そして口をしっかりと結んでから、もう一度強く頷いた。私の目からは涙が落ちていた。ナオコは私を受け入れてくれた。彼女は私を、この私をしっかりと抱きしめてくれた。ガラス細工を手のひらで包むように優しく私を抱きしめてくれた。一度あふれた涙はとどまることを知らなかった。それまで自分一人の心で担いできた重荷。いったいどれほどの荷物を背負っているかさえ知らなかった。一旦荷物を下ろしてしまうと、それまで背負って歩いていたものの重さが感じられる。背中が軽い。荷物はすでに地面の上だ。それでも、重さの不在を通して、軽さを通して、私はその重さを知ることができた。

ナオコに打ち明けたおかげで、私の気持ちはずいぶん楽になった。もちろん打開策が見つかったわけではない。状況は何一つ変わっていない。私はユキナに想いを打ち明けることはできないし、異性を好きになるわけでもない。それでも、ナオコが私を理解してくれていると思うだけで心が軽くなった気がした。

ナオコは私を受け入れてくれたんだ。

そこには抵抗もなく、嫌悪もなく、偏見もなかった。

私、ひみつの続き

私の高校生活は概して充実していた。ユキナへの恋心は最後まで日の目を見ることはなく不毛に終わったが、ナオコという一生の友達を得ることができた。それに考えてみれば、初恋を实らせるのは誰にとっても簡単なことではない。ましてや私の場合はなおさらだろう。「初恋は叶わぬもの」という格言的なものであり、時には科学的事実のような重みを伴って語られることさえある。そこに同性しか愛せないという不利な条件が加われば、その格言の重さはなおさら際立つことだろう。

高校卒業後、私とナオコはそれぞれの道を選択した。私は富山に残ることに決め、ナオコは上京することを決めた。私はナオコに残って欲しかったし、ナオコは私が東京の大学へと進学することを望んでいた。公園のベンチに座って長い話し合いを持ったこともあった。私達は穏やかではあるけれども執拗に互いの立場を説明した。しかしどれだけ話し合った所で答えがでないのはわかりきっていた。それはどんな結論や妥協ももたらすことはなかった。

「私は東京に行かなきゃだめなの」とナオコは言った。彼女はその言葉を呪文のように繰り返し返した。「このままここにはいられない。自分の可能性を試してみたいのよ。東京に出て行っただけで何かが突然に変わる訳じゃないのはわかってる。もしかしたら何も変わらないかもしれない。でも、オシャレな服をきて街を歩くのが目的で行きたいって言うてる訳じゃないの。それはわかってね。東京には未知の出会いと未知のチャンスが待ってる。私はそこに飛び込んで自分の目でその可能性を見てみたいの」

そして必ず最後に自分に言い聞かせるようにつけ加えた。「東京にいかなくゃだめなの」

私にもナオコの熱を感じることはできた。正確に言えば、私も同じ気持ちを抱く内では共有していた。それは十代後半の地方に住む

高校生にとってはいたって健全かつ自然な感情だからだ。それでも口にはだせなかった。言葉にしてしまうと自分を引き止めておけない気がしたから。私には私の責任がある。父親が死んでしまってから、文字通り身を削るように私を育ててくれた母を一人残して出て行くことは絶対にできなかった。

「東京の大学に進んでもいいのよ」と母は私に何度か言った。そしてその言葉は彼女の本心を語っていたのだろう。私にはそれがわかっていて。それでも私にはできなかった。それはもしかしたら母親のためではなく自分自身のためだったのかもしれない。母親を独り残して上京することによって生じるであろう罪悪感から身を守るための選択だったのかもしれない。今になっても私には推測することしかできない。私の中にしか答えがないことはわかっていても、それを決して見つけられない。自分に探すつもりがないのかもしれないし、巧妙に隠されているからかもしれない。それさえもわからない。一つだけ確実なのは、もう一度同じ選択に直面したとき私はやはり同じ決断を下す、ということだけだ。

大学生になつてからも、私とナオコは連絡をとりあった。富山と東京。離れた場所ではあるが、今の時代電話だってあるしメールだってある。大航海時代に旅にでてしまった友人と連絡をとるのは訳が違う。昔、といつてもそれほど遠くない昔だが、電話がない時代の人々がどのように生きていけたのかが不思議でならない。ナオコと離れて連絡をとるようになってから、私はますます強くそう感じた。電話がない時代。もちろん携帯なんてない時代。人々は手紙でしか連絡を取り合うことができなかった。それは私にとっては暗黒時代のように思える。大袈裟かもしれないが本当にそう思えてしまう。映画でよくあるような闇が支配する時代だ。人々はその闇の世界で、窓のない地下牢獄にいられ、目隠しをされ、おまけに手錠までかけられている。そんな世界だ。しかし映画との決定的な違いは、その時代が遠からぬ過去に実際に存在していたということだ。

人々は実際にその時代を生き抜いていたのだ。とても信じられないけれど、本当に。

大学にも友達と呼べる人間はいた。食堂でランチと一緒に食べたり、講義のノートをみせあったり、週末には買い物に出かけたりもした。それでも私は毎日のようにナオコに電話をかけた。どんなアルバイトをするべきだろうか、来学期の授業は何をとるべきだろうか。そんな感じた。それらの相談内容は同じ大学に通う友人達にしたほうがはるかに話の早い類のものだった。ナオコとは大学も違うので授業のカリキュラムも別だ。バイトにしても東京と富山ではずいぶんと事情が違っていたはずだ。それにも関わらず、一から事情を説明する手間を踏んでまでナオコに相談することを私は好んだ。近くにおいて毎日のように顔をあわせる友人達よりも、ナオコの方が私にとっては近い存在であり続けた。私は幸せだった。もちろん当時は自覚することはなかった。あくまで今振り返ってみれば、ということだ。毎日とはとてもスムーズにながれていた。まるで立山から流れる雪解け水のようなだった。母に愛され、私を理解してくれる友人がいた。そしてそれは太陽のように決して消えることはないように思えた。少なくともそう願っていた。

私は大学時代に、一人の男性と付き合ったことがある。タカシとというのが彼の名だった。それは2年生になったばかりの春だった。もちろん私は同性愛者で、男性を愛することはできない。その事実はどこまで行っても変わらない。でも、大学の友人たちは私の秘密を知らなかった。そして私は、自分でもいうのも気が引けるが、わりと端正な顔立ちをしている。それにスタイルだって悪くない。キャンパスを歩いていて男子生徒の視線を感じる時もある。普通の女性であれば、それは自分に自身がありすぎる故の勘違いだと言われても仕方がないだろう。ただ私に限って言えばそれはあり得ないことだ。性的興味もない異性からの視線を頭の中で作り上げたりはしな

い。そんな事実は私にどんな優越感ももたらしてはくれない。友人たちは口を揃えて私が彼氏を作らない理由を聞いたがった。彼女たちは事あるごとに男友達を私に紹介しようとした。どうして彼氏を作らないの、と彼女達は口を揃えて言った。彼女達がどうしてそこまで私に彼氏がいるかどうかを気にしなければいけなかったのか全くわからない。でもとにかく何度も尋ねた。最初は適当にあしらっていた私も、やがて言い訳に窮するようになってしまった。どれだけ努力しても恋人ができない人がその言訳を見つuckerのは簡単かもしれない。でも恋人を作らない理由を探すのはなかなか大変なことだ。ましてや心にない出任せを並べなければいけないとなると、それはなおのこと困難になる。そして私に男友達を勧めてくる彼女達の話の聞いていると、もしかしたら付き合ってもいいかもしれないという気持ちが私の中にも生まれてきた。もちろん本気で愛することとはできないけれど、付き合うことくらいならできるかもしれない。それに彼氏がいるという事実は、登山者がクマ避けにぶら下げる鈴のように、煩雑な会話を私から遠ざけてくれるかもしれない。高校以来、私には好きな人がいないというのも大きな理由の一つだけだ。

ナオコも私の意見に賛成してくれた。というか、私の意見を尊重してくれた。彼女が私の意見に反対することはめったにない。彼女はいつでも私の話をじっくりと聞いてくれる。話の筋を折るようなことは決してせずに、耳を傾けてくれる。最低限の質問を的確にし、話の続きを促してくれる。無駄な動きは一切しない有能な指揮者のように。

ナオコと話していると不思議な感覚を覚えることがある。彼女に向かつて話しているのか、私自身に向かつて話しているのかわからなくなってしまうのだ。

タカシを紹介してくれたのはミキだった。彼女とは英語のクラスが一緒に、クラス内のグループワークがきっかけで仲良くなった。

PHSにアニメのキャラクターやぬいぐるみをこれでもかというくらいぶら下げているが、とても落ち着いた口調で話す女の子だった。私が相談を持ちかけるとミキは快諾してくれた。いい人がいるわ、と言って重たそうな携帯をバッグから引っぱりだして電話をかけた。その翌日にミキとミキの彼氏、その彼のバイト先の先輩であるタカシと私の4人で飲みに行くことになった。

タカシはすらりと身長が高く、とても優しい顔をした男性だった。春らしい薄手のジャケットがとてもよく似合っていた。変に馴れ馴れしい態度もなく、初対面にふさわしい適度な距離感を持った話し方にも好感を抱くことができた。最初の自己紹介が終わってしまつと、寛いだ雰囲気で時間を楽しんだ。私は別れ際にタカシから連絡先を聞かれたときに、素直に電話番号を書いた紙を手渡した。

それから私達は週末を一緒に過ごすようになった。たいていは、タカシが水曜か木曜の夜に電話をかけてきて私を週末のデートに誘った。最初のデートは映画だった。その次の週は砺波のチューリップ畑までドライブをした。そんな生活が一ヶ月ほど続いた。

私はタカシと時間を過ごす週末を待ち遠しく思うようになっていった。彼との会話は楽しかったし、彼は私を笑わせてくれた。一緒にいると落ち着いた気分になった。それでも私は恋愛対象、つまりは性的対象としてタカシを見ることはできなかった。もし私が男性を好きになることができて、タカシのような人と一緒に過ごせたらどんなに素晴らしいことだろう、と私は思った。本当にそう思っていた。幸せな人生を歩めるのかな、と思い巡らせた。彼を恋愛対象として考えるよう努力した。自分を納得させようとした。でも全ては無駄だった。結局のところ、私が愛せるのは同性だけなのだ。それは私の生来の性質であつて、私という人間を構成する要素の中心にどつしりと腰を据えている。どれだけ強く押してみても動かすことはできない。

出会ってから2ヶ月がたち、タカシが私達の間係を一步進めようとしているのがわかった。私もできることなら、タカシに抱かれた

いと思った。そして思いつき幸せをかみしめたいと願った。でもそれは私にはできないことだった。私の体はタカシを求めてはいない。私は次第にタカシに対して一種の罪悪感を抱くようになった。私は彼の時間をもてあそんでいるだけなのかもしれない。でも同時に、彼に別れを告げる勇気は私にはなかった。彼は私の心の決して小さくない部分を占めていたからだ。

でもいつまでも曖昧なままでいることはできなかった。最初の飲み会から5ヶ月がたとうとしていたその日、私たちは車で金沢まで買い物に行った。富山にはないブランドを扱うお店もあり、私は2ヶ月に1度は金沢に出かけていた。

10月になり、僅かに残っていた夏の気配を秋が完全に覆い隠そうとしていた。街の色が一段薄くなり、季節は確実に移行していた。通りを歩く人々は黒や灰色といった服をまとい、ブーツ姿の女性もいた。

私達が富山に戻ってきたのは夕方の6時くらいだった。高速をおりてすぐ近くのマレーシア料理屋で食事をすませた。いつもならそのまま私のアパートまで送ってくれるタカシが、私を彼のアパートへと誘った。車のエンジンをかけてから、彼は私に向きかえって言った。「今日はおれのアパートに泊まっていかないか？」

断ることはできなかった。いやとは言えなかった。もしかしたらアルコールが入っていたのもあるかもしれない。何とかなるような気もした。いざとなれば、できる気がしたのだ。少なくとも、試してみてもいいと思った。

私は小さく頷いた。

彼のアパートへと向かう車の中は静かだった。それぞれがそれぞれの期待と不安に耽っていた。叩けば砕けて割れてしまいそうな緊張が車の中に漂っていた。彼も緊張していたし、私も緊張していた。それもありだ。私は、できるできるできる、と呪文のように心の中で繰り返した。大丈夫、大丈夫、大丈夫。

アパートに入っすぐ彼が後ろから抱きついてきた。彼の息が首筋にかかる。彼の興奮が背中越しに伝わってくる。そしてそのまの勢いでベッドに押し倒された。彼は私を仰向けにし、それから私の唇にキスをする。今までにない激しいキスだ。彼の手が探るように私のＴシャツの中に入れられる。最初は慎重に様子を窺うように。それから強引に。でも、私には何も感じることはできない。私はただそこにいて、与えられるものを受け流すことしかできない。それは、私をこれまでにないくらい悲しい気持ちにさせた。ひどく孤独にさせた。気が付くと私はタカシの手を払いのけていた。

「だめ、やっぱりできない」戸惑うタカシに向かって私は言った。

「だめって、何がだめだっていうの」タカシは動揺した声で尋ねた。「できない」私は同じ言葉を繰り返した。

「できない……」彼は私の言葉をなぞるように言った。「おれの事が嫌いななの？」

「嫌いなわけじゃないの……でもだめなの。ごめんなさい」それだけ言ってしまうと、何か言おうとしているタカシを残して私は逃げるように部屋を出た。

それから一週間、毎日のようにタカシから着信があったが、私は電話に答えなかった。できることなら、彼と一緒にいたい。楽しい週末を過ごしたい。でもそれはやはり叶わぬことなんだ。目的地のない船に乗り込むことはできない。私にとっても、彼にとっても何もよい結果はもたらしてくれない。

やがて携帯はなくなかった。それは沈黙だけが取り柄の重石のように、静かに私のバッグに入れられていた。

僕、完璧なコーヒーが舌に残す渋み

僕とその女性は窓際に席をとった。彼女はメニューをしばらく眺めたあとでブレンドコーヒーを注文した。僕も同じ物を頼んだ。顔見知りのオーナーがにやついていたが、僕は気付かないふりをした。いつもであれば僕も自慢げに微笑み返していたと思う。でも今はとてもそんな気分にはなれない。

「喫茶オオタニ」というのが喫茶店の名前だ。オオタニはオーナーの名前から取っている。僕は閉店後や休日を頻繁にこの喫茶店で過ごした。店内にはいつでも心地よい音楽が心地よい音量で流れている。読書や会話の邪魔は決してしない音量だ。だからといって話が店内に行き届くことを心配させるでもない。フランス人シェフがデリケートなソースを作るのに似ている。どこまでも計算されている隙がない。一見気取らないが、裏には確かな技術が存在している。最近では、最適な音量で良質な音楽を流している喫茶店が少なくなってしまった。店内には茶色の革張りソファが置かれている。それは回りの空間さへも過去へとひっぱっていける重たい存在感を持っている。歴史を刻んだものだけがもつことのできる種類のものだ。革は色が褪せて落ち着きを放っていた。そして赤や黒のしみが数箇所に勲章のようにこびりついていていた。そして何よりも僕がこの場所を気に入っている理由は、いつ来てもお客が2、3人しかいないことだ。喫茶店には最適な音量と同様に最適な客数が存在していると僕は考える。満席では落ち着けないし、誰もいなくても落ち着けない。2、3人という客の数はまさに理想的だ。

コーヒーが運ばれてくるまで僕たちは黙っていた。彼女はずっと下を向いて、鞆の紐を人差し指でいじっていた。

彼女はコーヒーを口に運んで、カップをそっとソーサーに戻した。「おいしいでしょ？僕ここのコーヒーがすごく好きなんです」と僕は言った。

「ええ、とつても」

「休みの日もここにきて読書をするんですよ。すごく落ち着けて集中力も高まるようなきがして」

彼女の口元が小さく動いただけで言葉が帰ってくることはなかった。僕は気を取り直して続けた。「オーナーとも結構古い付き合いです。なんせ僕の店とも近いですから…」

「今日は突然ごめんなさい」と彼女は僕の言葉を遮って言った。小さな声だったが、そこには確かな気概が窺えた。「どうしてもこの子を手放さなくちゃいけなくなってしまったんです。でも頼れる人なんて誰もいなくて。野放しにしていくのだけは嫌だと思ってるから、ちょうどペットショップの看板が目にはいったんです。ご迷惑をかけてしまうのはわかってます。でも、何とかお願いできませんか？」

僕は少し考えてから言った。「名前は？」

彼女は少しだけ戸惑った表情をみせたが僕の質問に答えた。犬の名前はコリー。飼い始めてから2年になるらしい。

「で、どうして手放さなきゃいけなくなってしまったんですか？」

彼女の指先は鞆の紐を触り続けている。人差し指に巻きつけては、それをほどいている。「コリーがかわいそうだから…」囁くような声で彼女が言った。

そう言ってしまうと彼女は少し疲れた表情を見せてから視線を落とした。テーブル上には彼女にしか見えない架空の一点が定められているようだ。僕と彼女の間のテーブルには、彼女にしか見えない模様でも浮かび上がっているかのようだ。そこに思考が介在する余地を見て取ることは出来なかった。心はどこか別のところに放たれたまま、肉体だけがさまよっているように見える。そんな彼女の表情は僕に1人の女性を思い出させた。僕が始めて真剣に付き合った女性だ。大学卒業が間近にせまっていた冬に、僕たちは出会った。彼女はとてもすてきな女性だった。そして控えめにいつてかなり端整な顔立ちをしていた。僕ら2人が歩いていると、すれ違う男たち

は必ずといっていいほど彼女に目を奪われた。そして、大方の場合は小声でのひそひそ話があとに続く。もちろん彼らの声は聞こえない。でも予想は容易だ。なんであいつがあんなにきれいな女性を連れて歩いているんだ？表現に多少のバラエティはあったとしても、要はこういうことだ。僕は別に特段ひどい容姿をしているわけではない。皆が振り向くほどのいい男ではないが平均以上の自信はある。比較的小奇麗だとも思う。今も昔もシャツはいつもアイロンをかけた張りのあるものを着ているし、髪だって短くて清潔感がある。それでも彼女の隣を歩いていると僕は世界で一番醜い男になってしまったかのように感じられた。まるで美女と野獣だ。

僕は彼女の息を呑むほどの容姿に惹かれていた。特に彼女が怒ったときの表情は呼吸を忘れてしまうほどだった。もしかしたら表情という言葉は当てはまらないのかもしれない。僕が惹かれたのは、彼女の無表情だったからだ。口づぐんでつんとした彼女のそんな表情が大好きだった。

「最近横浜に行きました？」

僕の質問に彼女は目を少し開いて驚いたような表情を見せたが、いえ、と答えた。

「もしよかったら今度の日曜日一緒にどうですか？もちろんコリーも一緒に。」と僕は言った。それから付け加えるように続けた。「お店として買取ることではできません。でも、僕が個人的に引き受けてあげることはできるかもしれない。ただ、無責任に二つ返事はできません。人間同士に相性があるように、犬と人間にだって相性があるからです。返事をする前に、少なくともコリーがどんな犬なのかを知りたいんです。それが僕にとって最適だし、コリーにとって、そしてあなたにとっても安心できる方法だと思います」

彼女はしばらく無表情に先ほどと同じテーブルの上の一点を見て、やがて顔をあげて、わかりました、と言った。「じゃあ今度の日曜日、10時にお店の前にきます」

それから彼女は静かに席をたって、コリーを連れて喫茶店を出て

行つた。犬は相変わらず小さく震えていた。

僕は自分の言葉を頭の中で繰り返してみた。そして少し後悔した。犬を口実にデートに誘っただけだと思われたのだろうか？彼女が追い込まれている状況を利用したように見えただろうか？そう考えると顔が熱くなった。それでも、他に何か選択肢があつたかを考えてみたところで何も思いつかなかつた。仮に、彼女は何らかの形で精神的に追い詰められているのだとしよう。僕が断れば彼女に残される選択の幅は限りなく狭まってしまう。僕は自分にそう言い聞かせた。僕は正しいことをしているはずだ。僕はカップの底に残っていたコーヒ―を飲みほした。それは微かな苦味を舌に残していった。

私、仕事についての考察

卒業後に私は富山での就職を決めた。自宅から車で15分の距離にある花屋だ。

子供の頃よく母に連れられていったスーパーの中にその花屋はある。店先にはいつでも色彩豊かな花が飾られていた。店先から5メートルほど離れて店頭ディスプレイを眺めるのが私の一番のお気に入りだった。まるで展示物が毎日変わる美術館を訪れているようだった。花の配置は私が訪れるたびに変わっていて、母が買い物をする間に、その景色を眺めるのが幼い私の日課だった。高校になる頃には、私はすでに花屋で働くことを胸の内に決めていた。だからといって可憐なイメージだけで決めたわけじゃない。何より私を惹きつけたのは、花が人に与える影響の強さだ。花の色と種類によって作り出される花束は、人をとても幸せな気持ちにさせることができる。それはアレンジする人の気持ちや意図を見事なまでに反映し、見るものの心を強く動かす力を持っている。

大学時代に私はフラワーアレンジメントに関する本を読みあさった。夏期休暇を利用してフラワーアレンジメント教室に熱心に通いもした。そのかいあって、大学卒業間近の私には莫大な知識が蓄積されていた。私は慣れ親しんだ花屋の店長であるヨリエさんに、彼女のお店で働きたいと勇んで伝えた。ヨリエさんは考える様子もなく、いいわよと言ってくれた。

彼女は毎日お店の前で花を眺めていた少女を覚えていてくれた。いつか必ず花屋で働くだろうなって思ってたのよ、と彼女は笑みを浮かべて言った。「すごく楽しそうにディスプレイを見てたのを今でも覚えてる。こっちが緊張しちゃうくらい一生懸命にね。あなたは知らないだろうけど、プレッシャーだったんだから。あの子の期待を裏切らないようなアレンジをしなきゃっていつも思ってたのよ」そう言ったヨリエさんは、私が覚えているよりもいくぶん落ち着い

て見えた。記憶の中の彼女は、ピンク色のエプロンが似合うお姉さんだった。若さという有り余るエネルギーを周囲に放っていた。でも目の前にいる彼女にそれはない。外見が老けてしまった訳ではない。30代前半であろう彼女の体型は以前と変わらずにスリムなままだ。顔も髪型以外に変化は認められない。それでも4年の歳月は目に見えないものを変えるには十分なのかもしれない。若い私にとって時は常に私の味方をしてくれるものだ。それは何かを与えてくれるものであり、私から何かを奪うことは決してない。でもれが永遠に続くことはないのだ。それはわかっている。ある時点で転換点は確実に、そしておそらくは唐突に、訪れる。後戻りはできない境界線。完全なる一方通行。その地点を越えてしまえば、時は手の平を返したように私達から多くのものを奪い始める。

就職が決まったその夜、私はナオコに電話をかけた。彼女は私の就職を心から喜んでくれた。彼女は私が花屋の前で過ごした日々を知っていたし、私がどれほど狂信的なまでにフラワーアレンジメントを勉強していたかを知っていた。

「ユイは最高の花屋さんになれるよ」と彼女は電話口で声を高めた。「それだけ花が好きなんだから、まさに天職だよ。私も無事に貿易会社に就職が決まってるし、これで2人は安泰だね」

私たちはそれぞれ冷蔵庫から冷えた缶ビールを出して、電話越しに乾杯をした。

「2人の未来に」

花屋での仕事は楽しかった。アレンジして販売するだけが仕事じゃないのは始からわかっていたので、理想と現実の差に落胆することもなかった。私が大学時代に読んだ本の中には、花屋の業務内容に関するものも多く含まれていたからだ。日々はおおむね私の期待通りに流れ、充実した生活を送ることができた。ただ慌しく過ぎていった1年目と違い、2年目になると顔なじみのお客が増え、その中の何人かは私のアレンジをととても気に入ってくれた。彼女達は、

何か入り用があるたびに、私にそれに見合ったアレンジを依頼した。私は彼女達のイメージをできるだけ損なわないように、念入りに話を聞いた。どのような場面で、誰に渡すのか。そしてどのような気持ちで送るのか。それらのリクエストを私の中で消化し、そしてアレンジ案を膨らませた。

そして7年がたった今では、私は店長となって毎日を忙しく送っている。

とても充実した毎日だ。

僕、偉大な芸術家の寂しい最期―（前）

それからの2日間を僕は落ち着かない気持ちで過ごした。もしかしたら今にも彼女がきて、「やっぱり日曜はやめます。犬は他をあたってみます」と言うかもしれない。いや、もしかしたら彼女は2度と姿を見せないかもしれない。そんなことを考えながら僕はドアを眺めて1日を送った。結局その日はドアが開かれることはなかった。彼女だけではなく、誰も店に来ることはなかった。無理もない。12月の寒空の中、しかも平日に誰がペットショップになんて立ち寄るだろう。世の中の人たちはそれほどまでに時間を持て余してはいないはずだ。僕は新聞を広げながら、10分に1度は、そして閉店間際には5分に1度は顔をあげて店内を見回し、それからまた新聞に目を落とした。

日曜日は前日までのことを忘れてしまったように晴れあがっていた。鳥も空の少し高いところを飛んでいる気がした。僕は少し早目に家を出て、「オオタニ」でモーニングセットを食べた。それから店に向かい、ドアに「本日休業」のはり紙をした。店内を回ってエサを取り替えてしまうと、他にすることもなかったので新聞を読んだ。

約束の時間になっても彼女はやってこなかった。10分が30分になり、30分が1時間となった。彼女は他の誰かに犬を任せることにしたのだろうか。だとすれば彼女が今日ここに来る理由はない。その考えは、僕が思っていた以上に僕を落胆させた。自分でも驚くほどに。

今からでも店を開けることはできる。ドアに下げた本日休業のサインを裏返せばそれで終わりだ。それだけで僕は「営業中」となる。少しだけ考えたあとで、その考えを振り払った。そもそも休もうと思っていたからか、どうしても開店する気にはなれない。それにどうせ誰もこないんだ。

僕はもう一度「オオタニ」に行くことにした。おいしいコーヒーと落ち着ける場所が必要に思えた。新聞だけを手に僕は店を出た。

僕には探しているものがある。正確には、探している人だ。それも、ただの人ではない。

6ヶ月前の今日、6月15日に僕の彼女はいなくなってしまった。僕たちが出会ってからちょうど5年目だった。ちょうど、ぴったり5年。「いなくなった」という表現は多くの可能性を内包している表現だろう。そこには意識的、無意識的に関わらず曖昧さが介在している。でもそれ以外の言葉を見つけるのは至難の業だ。そこには一定の曖昧さが必要とされている。なぜなら、彼女の「失踪」が、自己の判断でなされたものなのか、それとも、そこには何かしらの外的な力の関与があったのかわかっていないからだ。一つだけわかってるのは彼女はもういないという事実だけだ。

僕と彼女は遠距離恋愛をしていた。彼女が住んでいたのはスペインのバルセロナだ。3年前の7月、スペインの偉大な建築家アントニオ・ガウディの作品群に魅せられた彼女は繁殖期のネコのような目をして日本を発っていった。それ以降、彼女はガウディが残した建築物を描き続けた。バルセロナの街にはガウディの作品が散りばめられていて、それは宝石のような輝きをもって街を彩り飾っている。ヨーロッパの中でも前衛的なバルセロナの街。ガウディが建築という形式を通してバルセロナというキャンパスに描き出した独特な曲線は異様なまでの存在感を放っており、そして美しい。

彼女は未完の大作サグラダ・ファミリアをスケッチブックに描き綴った。

硬さの違う数種類の鉛筆だけを使って彼女はスケッチを続けた。彼女はくる日もくる日も描いた。朝はとも早く出かけた。鉛筆とスケッチブックの収まったシヨルダーバッグと簡単な折りたたみ式

イスだけが彼女の持ち物だった。そして所定の位置に陣をとる。サグラダ・ファミリアの全景を望める絶好のスポットだ。スペイン到着後の3ヶ月間を費やし探し当てた。途方もない距離を歩いた。自分が三蔵法師か何かになったような気がしたわ、と彼女は僕に向かって言った。もう歩けないわ、と。しかし、それを語る彼女の声は秘宝を見つけた海賊を僕に思い起こさせた。

一年がたとうとしていた頃、彼女はちょっとした話題になった。毎日サグラダ・ファミリアだけを熱心に描くアジア人が地元メディアの関心をひき、ニュースで紹介されたのがきっかけだった。僕は直接その特集を見たことはない。放送の翌日、彼女が嬉しそうに僕に電話で報告してくれた。彼女の声は、まるで彼女が隣の部屋にいるかのようにクリアに聞こえた。タイムラグもなにもない。雑音はいるわけでもない。国際電話だと気付かせるような要素は存在しない。録画したテープを送るね、と彼女は言った。しかし日常の雑事の中に紛れてしまったのだらう、結局それが届くことはなかった。

アントニオ・ガウディはその生涯を通して数多くの建築をバルセロナの街に残した。どれも当時の既存の建築物からは一線を画するような奇異な外観を備えていた。彼は自然を常に開かれている本と考え、自らの建築デザインに取り入れていった。木々の根が持つうねりの曲線。垂れる枝が描く優雅な曲線。自然を師と仰ぐ彼は自らの建築をもってバルセロナの街に見事な曲線を描いていった。

ガウディの人生は彼の作品同様に風変わりなものであった。幼い頃は病弱な体質に苦しめられたガウディは、大人になってからは億劫な性格に悩まされ女性恐怖症となってしまう。同じく病弱だった兄弟たちとも死別をしたため、彼は孤独な人生を送ることになった。それはもしかしたら幸運なことだったのかもしれない、と僕は思う。芸術家は生来孤独でなければいけない。結局のところ、芸術とは自身の内面を描く物だからだ。誰かの写しではなく真にオリジナルの物を生み出そうとした場合、人は自身の内に向かうしかない。外的

影響を受けずに守られている自分の核のような部分に降りていかなければいけない。そしてそこから何かを掬い上げてこななければいけない。そうすることで初めて生まれたての赤ん坊のような純粹で独創的な芸術が生み出される。

建築に捧げたガウディの人生の終わりは唐突に訪れた。彼は仕事場であるサグラダ・ファミリアに向かう途中で路面電車に引かれて死んでしまう。

偉大な芸術家の寂しい最期だ。

僕、偉大な芸術家の寂しい最期―（後）

僕の彼女の失踪に関してはかなり大規模な搜索活動が行われた。日本大使館の協力に加えて、現地警察も全面的に協力してくれた。彼女が地元で名物的な絵描きとして名を知られていたこともあり、犯罪に巻き込まれた可能性にも搜索の目は向けられた。彼らは周辺に連なるお土産屋のオーナーや、通りに並ぶ似顔絵家、そして地元住民への聞き込みを行った。その途中経過は被害者家族、つまりは彼女の家族を通して僕にも知らされた。日本大使館の職員も現地の日本人に連絡をとり彼女と交流のあった人物を探した。何らかの情報が得られれば、と尽力してくれた。それでも手がかりが見つかることはなかった。もちろん彼女の住んでいたアパートの搜索も行われた。僕も3度行ったことがあるアパートだ。争った形跡はなく、何か盗まれている様子もなかった。クローゼットには3日分ほどの服がおさまるくらいのスペースが孤独なクレーターのように残されていた。

彼女の家族にも、そして僕にも、彼女が自ら姿を消してしまうような原因は思い当たらなかった。失踪の直前まで彼女はいつも通リ電話をくれた。話す内容にも特に変化は無かった。おいしいベーカーリーを見つけた。漢字を少し忘れてきている気がする。次はいつスペインに来てくれるの？そんな感じだ。

事件性を示す証拠がなかったにも関わらず、地元警察はずいぶん丹念な捜査を行ってくれた。しかし彼女は見つからなかった。そして4ヶ月で特別捜査は打ち切られた。もちろん搜索は今も継続している。動因される警察官の数が減ったのは事実だが、少なくとも誰かが彼女を搜索しているという事実彼女の両親や僕を安心させた。

僕はとても混乱している。まるでピースが足りないジグゾーパズルに取りかかっているようだ。どこかしかるべき場所にピースは隠

されている。いや、隠されているはずだ。そう望んでいる。そうじゃないければ余りにもひどすぎる。

状況がつかみきれていない。わからないことが多すぎる。必要な情報が決定的に不足している。どうして彼女はいなくならなければならぬんだろう？ いったい何があったんだろう？ この6ヶ月間、僕は考え続けた。いくつかの仮定もたててみた。でももちろん答えはでなかった。それは彼女しか知らないことだからだ。

彼女がいなかったことが何を意味するのか未だにわからない。その事実はあまりに巨大すぎて、僕の視界からはみ出してしまっている。使い捨てカメラを使って、エンパイアステートビルディングの全景を収めようと苦闘しているようなものだ。そもそも彼女がいることが僕にとって何を意味していたのだろう。僕は彼女を愛していた。それは間違いのないことだ。自分のことのように、もしかしたら自分のこと以上に、彼女の身の上を心配していた。彼女の話であれば何時間でも聞くことができた。インターネット電話が普及してからは、10時間をパソコンの前で費やすことも珍しくはなかった。それでも時間をもったいないと思ったことなんて一度もなかった。僕は彼女と寝るのが大好きだった。つきあってから5年がたっても、彼女に対する性的な興奮が衰えることはなかった。彼女に出会ってから5年、僕は彼女以外の誰とも寝たことはないし、その可能性を考慮したことさえもなかった。僕が知る限りにおいて、そしてそれはかなりの確信を射ていると確信しているが、彼女にとっても同じことが言えたはずだ。

僕が「オオタニ」に行こうと店の扉を開けると、そこにはコリーが小さく座っていた。辺りを見回しても、そこに彼女の姿はなかった。

僕は小さく溜息をついた。

コリーが何か言った気がしたが、そんなはずはない。
僕はもう一度溜息をついた。

私、人は何かを失うために生きている？

宇宙は、つまり私達が定義する世界は、ビッグバンから始まったとされている。少なくとも今のところは。

全てが完璧な、無限な特異点から宇宙は始まった。そしてその瞬間から私達が知る世界が始まった。時間は方向性を持って私達が未来と呼ぶ一方向に向かって流れ始めた。完璧な秩序から生まれた宇宙は無秩序に向かって進む。時間の経過と共に秩序あるものは、その秩序を失う。ジグソーパズルを思い浮かべて欲しい。完成したジグソーパズルを箱に入れて振る。振れば振るほどにパズルのピースはばらばらになっていく。それと同じだ。

大学時代に読んだ宇宙物理学の本に書いてあった。ステイブ・ホーキングスの講義をまとめたものだ。たはすだ。今でも本棚の奥に眠っている。本の大半は原語で読んだせいもあるが、何が書かれているかを理解することはできなかった。でも、この一部だけは私に鮮明な印象を残した。難しい言葉を使って説明されていたため何度も読み返さなくてはいけなかったし、どうしても理解できない箇所は論理的な説明を勝手に頭の中で加えて空白を埋めた。

当時、私はこの考え方を気に入ったし、今でも気に入っている。考えれば考えるほどに軽い立ちくらみのような不思議な感覚に襲われる。それがどこから生まれるものなのかはわからない。自分が立っている足場が実は宙に浮いていたと知られるようなそんな感覚だ。それは宇宙の法則というよりは哲学のように聞こえる。完璧な秩序が進むべき方向は1つしかない。完成したパズルはばらばらになる時を待ち、ワイングラスは割れる時を待っている。

母の病気を知らされたのはちょうど一年前のことだった。

私はいつもどおり仕事を終えて帰宅をした。母は台所で夕食の準備

備をしていた。母のほうの仕事が早く終わるため、食事の準備は彼女がすることになっている。皿洗いが私の担当だった。彼女は私が帰ってきたのを見ると、あと15分くらいで準備ができるから先にシャワーしてきていいわよ、と言った。

花屋での仕事はかわいらしい印象とは裏腹に意外と体力を使う。店先にたつて、微笑みながら花を売るだけが私たちの仕事じゃない。

私がシャワーから出ると、テーブルには夕食が並んでいた。大根の千切りと水菜のサラダに、豚肉を甘酢で炒めたもの。それに、ジャガイモの煮物。もちろんご飯と味噌汁もある。私の母はどんなに疲れていても食事の準備に手を抜いたりはいしない。健康的な食事なしに健康的な人生はない、というのが彼女の口癖だった。それとも一つ。ご飯中にテレビは見ない。これが、母が私に口をすっぱくして言い続けたルールだ。我が家では唯一のルールと言ってもいい。勉強を強要されたことも、友達と遊びに行くことを制限されたこともない。ただ、食事中にテレビをつけることだけは決して許されなかった。そこにはどんな例外もなかった。今から考えてみると、それは母にとっては、そして私にとっても必要な決まりだったのだろう。父親がいない私を育てるために、許す限りの時間を働いてすごしてきた母にとって、2人が夕食を食べる食卓こそが唯一の意思疎通の場であつたからだ。そしてその習慣は私が働き始めてから6年が経っても変わることはなかった。なにより私もその時間をとっても貴重なものと考えていたからだ。

その日の夕食が終わって、ビسケットをかじりながらお茶を飲んでいるときに母が思い出したようにいった。「ねえ、お母さんガンみたい」

母の言い方があまりにも緊張感のないものだったため、私は耳にした言葉とそれが示唆する事実とを上手く結びつけることができなかった。自宅が炎上する様子を呆然と眺める一家の長のような気持ちで、私は母の顔を何も言わずに見つめた。

母も私の顔を見返していた。次第に私の頭の中に母の言葉が染み

入ってくるのがわかった。私の脳が母の言葉を処理する。私がその意味を理解する。そしてその事実は深海に向かって限りなく沈む碇のように私の胸を引っぱった。聞かなきゃいけないことがたくさんある。気になることがたくさんある。でも言葉はその形を見つける前に、再び私の心へと引き戻された。

私は泣いた。激しく泣いた。嗚咽をあげて泣いた。何も考えることはできなかった。そこには悲しみがあり、いかなる感情や論理の介在も許されなかった。母のために泣いていたのか、私自身のために泣いていたのかわからない。ただ涙は流され、私の服を濡らした。しばらくたって母の手が私の手を優しく包んだ。そつと置かれた彼女の両手はとても温かかった。そこには確かな命の証があった。今まで私を守ってきてくれた手だ。ときに強く、ときに静かに、愛情を持って私をいかなる危険からも遠ざけてくれた手。それが無い世界なんて想像できない。私自身の心もぎとられるようなものだ。母は静かに言った。「今日再検査の結果がでてわかったの…確かだっけわかるまで、ユイには言わないでおこうって決めてたの。心配かけたくなかったからね」母は一言一言の重みを秤で量るようにゆっくりと話した。「かなり広がってしまったみたいで、手のうちようがないみたい」

彼女は小さく息を吸い、気持ちを落ち着かせるような仕草をしてから言った。「あと1年らしいの」

枯れたと思った涙が再び私の目に溢れた。母も泣いていた。私たちは床に座り込み、お互いを強く抱きしめて泣き続けた。

女、沈殿した意識のなかで聞こえる重たい声

女が部屋の鍵を開けるのを待っていたかのように電話が鳴り始めた。母親に違いない。自宅の電話にかけてくるのは彼女くらいなものだ。急いで靴を脱ぎ、リビングで受話器をとると、母親がもしもしもなく言った。「あら、今日はいるのね」。

「いないと思うなら携帯にかけてよね」、鍵をテーブルの所定の位置に置きながら女は答えた。「出かけてても連絡がとれるように携帯電話があるんだから」

「そうね、覚えておくわ」と母親は言った。が、それが全くのどまかせであることを女は知っている。彼女と母親の間でいくどとなく繰り返されてきたやりとりだ。テープに答えを録音しておいて、やりとりが始まったら流そうかと冗談交じりに考えたこともあるくらいだ。でも結局はより現実的な方法に落ち着いた。女は留守電のメッセージを変えたのだ。ただいま留守にしています、御用の方は携帯まで連絡下さい。それはもちろん母親にのみ向けられたメッセージだった。母親以外の誰一人として自宅の電話に連絡なんてしてこない。それでも母親から携帯に電話がかかったことは、ない。ただの一度も。

母はそれからしばらくの間、父や職場について話した。父のいびきがうるさくて眠れない、最近手がかさつく、パートの待遇が正社員と違いすぎる。どれも控えめに言って一度以上は聞いたことのある話だ。女に求められているのは、受話器を耳に当て、母が息継ぎをするたび、その一瞬の空白を埋める相づちを打つことだけだ。女は自分の意見が求められている訳ではないことをすでに学んでいる。アドバイスを求められているわけではない。ただ聞いてあげればそれでいい。それは彼女の母に限ったことではないと女は知っている。多くの人は多くの場合において話すという行為自体を求めているように思える。もしかしたら話す内容はたいして重要ではないのかも

しれない。示唆に富む哲学的発言なんて必要ないのかもしれない。何か適当な歌の歌詞の朗読でもいいのかもしれない。結局は何をいっても、それがどれほどに世界の真実を暴いていたとしても、特に何も変わりはないのだから。

「お父さんが帰ってきたみたいだからご飯の準備はじめなきゃ。じゃあね」と言つて電話が切れた。

うん、じゃあね。女は電話口にもかつて返事をした。

夕食を食べ終え、食器を洗い終わると時間は8時を少しまわっていた。彼女は沸かしたてのお湯でアルグレイをいれて、リビングのソファに座った。クッションを抱えて、それを2回ほど軽く叩いて形を整える。そしてテレビをつけてソファに沈み込んだ。

いつの間にか眠ってしまった。12時40分。4時間は寝ていたことになる。信じられないくらい長い間、ソファのうえで眠っていたようだ。テレビのスクリーンはさっきよりもまぶしく感じられた。

顔を洗おうと立ち上がった女の頭の中を、微かな違和感がよぎった。もしかしたら何でもないのであるかもしれない。しかし確かな違和感が女の中に存在している。この感覚はどこから生じているんだろう。彼女はゆっくりと目だけを動かした。左から正面、そして右。変化の兆候らしきものがあれば必ず拾い上げる自信はあったが、とくに異変は見当たらなかった。そのまま体を右回転でゆっくりと動かしていく。変わった所は特にない。女は小さく息をはいてから洗面所へ歩き出した。きつと疲れてるんだわ。

彼女は顔を洗うとすぐにベッドに潜りこんだ。4時間の眠りから目覚めたばかりだというのにすさまじい眠気が彼女を襲っていた。手を顔の高さに上げることさえも気だるく感じてしまふほどだった。

彼女は仰向けになって厚手の毛布をあご下まで持ち上げた。そして目を閉じた瞬間には深い眠りの中に沈んでいた。

沈殿した意識の中で誰かが何かを語っていた。静かで、重たい声で。そう、その声は実際に重たかった。いったいどうしたら声が「重み」という物理的な性質を持ちうるのかは女には分からない。でも、それは確かに重たい声だったのだ。

ゆっくりと、そして何度も、その声は女に何かを告げていた。

僕、真実は立ち位置で決まるもの―（前）

僕は結局横浜に行くことにした。僕とコリーで。店で座って一日を過ごすよりはいくらか魅力的な考えに思えたからだ。

日曜の首都高は車が折り重なるように連なっていた。車のルーフに反射する太陽の光がまぶしく輝いていた。環状線から芝浦ジャンクションを抜けると徐々に車が流れ出した。僕はこまめにアクセルとブレーキを踏みわけた。その間コリーはおとなしく助手席に座っていた。

「渋滞はぬけたから、これで大丈夫」と僕は試しにコリーに向かって言うてみたが、もちろん返事はなかった。

僕は運転しながら、どこかで聞いたことのある犬と飼い主の話を思い出した。テレビのドキュメンタリーで見たのだと思う。犬が主人の心臓発作の兆候を感じ取って事前に教えると言った内容だったはずだ。普段は大人しい犬が、突然吠え出す。すると決まって数分後に心臓発作が起こる。最初は偶然だと思ってた飼い主も、3度も繰り返された警告を偶然だと笑い飛ばすことはできなかった。それから犬が吠えたと必ず薬を飲む。おかげでそれ以来心臓発作は起こっていない。そんな感じだったと思う。

僕は山下公園の近くに車をとめた。日曜ということもあってパークイングの多くは満車だったが、運良くほど近い場所に空車サインを見つけることができた。

公園では人々が思い思いの方法で初冬の太陽を楽しんでいた。ベンチに座ってコーヒーを飲んでいるカップル。キャッチボールをしている親子。ボールを蹴り合っている子供たち。誰もが幸せそうに見えた。僕は公園の芝生の上でコリーを放した。彼女は嬉しそうに僕の周りをしばらく駆けてから遠くのほうへと走っていった。

芝生は深みのある緑をたたえていた。昨日までの雨のおかげだろ

う。右足に力を込めて踏ん張ってみると、水分を含んだ地面に踵の部分が埋まるのがわかった。ゆっくりと右足を浮かすと、そこには足跡が異様なほどにくつきりと残されていた。

僕はしばらくの間、黙ってコリーの様子を眺めた。コリーはまるで蝶でも追いかけているように左右に駆けている。顔を宙に向け、前足と後ろ足を命一杯に広げて跳ね回っている。左へ、右へ、左へ、とても気持ち良さそうだ。僕は最後に全力で駆けたのがいつだったか思い出そうとしてみた。でもどれだけ考えても無駄だった。高校での体育の授業が思い出せる限りの最後の全力疾走だった。もしかしたらそれ以来、一度も全力で走ったことはないのかもしれない。そう考えると、少しだけ寂しい気がした。

コリーは賢い犬だった。慣れない僕の家でも無駄に吠えたりしなかったし、僕の言葉に従った。毎朝、僕は店の犬3匹とコリーを連れて散歩にでた。彼らもうまくやっているようだった。

営業中は、これまでにまましてドアを眺めるようになった。彼女がコリーを引き取りにきてくれるかもしれない。可能性は低い。でもありえることだ。

次の日曜日も僕は店のドアを眺めて過ごしていた。ドアは開くことを忘れてしまったかのように入り口に立ちはだかっていた。

隣で丸くなったコリーの体は呼吸に合わせて小さく上下している。僕の呼吸よりも速いペースで小さい体が上下している。短くて艶のある毛が一方向に流れている。顔は茶色、背中黒と、足は白。体は3色の毛で覆われている。どれも同じ長さだ。それぞれの境目はアフリカ大陸の国境線のようにきれいな境界線を描いている。ときどき思い出したように尻尾が振りあがる。地面に置かれていた尻尾は勢いよく跳ね上がり、鞭のようにしなり、そして再び地面に着地する。

ドアは閉じたままだ。真ん中に大きな縦長のガラスが埋め込まれ

ている。それはドアの中心に位置し、膝から目の高さまでを占めている。ドアは木製だが、木目は見えない。茶色の塗料がのつぺりとそしてとても均一に塗られている。下から上までどの一点をとってみても、どんな些細な違いも見られない。僕はそんなドアが何枚も作られている場面を想像した。どこかの町の、小さな工場。塗料が正確に同じ厚さで塗られていく。そして同じドアが一日何千枚も作られる。そう、それらのドアは本当に同じなのだ。完成したドアは何万枚ものドアが眠る保管庫のような場所に運ばれる。彼らはそこで待つ。どこかの誰かに買われ、家のドアとしてその機能を果たす日を。ノブは金色だ。僕は自分がそんなドアの一枚になるところを想像してみた。周りには僕と同じデザインのドアが並んでいる。前も後ろも、左も右も、僕の視界が続く限りにびっしりと連なっている。早くここから出してくれないかな。ドアは思う。家の入り口として立派に役目を果たしたい。そして徐々に、倉庫の端から運び出されていく仲間を眺める。あれが自分であればいいのに。僕が彼で、彼が僕でも何もかわりはしないのに。

結局、この日も彼女はやって来なかった。僕はコリーを連れ、重たいドアを押して店を出た。

彼女がやってきたのは水曜だった。冬の雲を抜けて薄い日差しがさす午後だった。

僕、真実は立ち位置で決まるもの（中）

「この前はごめんなさい」と彼女は言った。

「大丈夫ですよ」僕は平静を装って答えた。「とにかく今日来てくれてよかった。それにコリーと十分に過ごすこともできました」

彼女は僕の言ったことに対して何かを考えた様子を見せて、それから言った。「引き取ってもらえますか？」

僕は彼女の目を覗き込んだ。僕の心はすでに決まっていた。不本意ではあるが、コリーのことを考えると僕が引き取るのが最良だろう。ただペットを売る立場にある僕の職業的使命は、犬たちを深く愛してくれる飼い主を見つけることにある。すこし大袈裟かもしれないけれど。その使命があるからこそ、そこに意義を見出せるからこそ、僕はくる日もくる日も飽きもせずここに座って、いつやってくるかもわからない飼い主たちを待ち続けることができる。

僕はしばらくの無言の後で、あらかじめ決めていた質問をした。

「引き受ける前に、どうしても1つだけ聞いておきたいことがあります。どうしてコリーを手放すんですか？この一週間、僕なりに考えてました。僕が見た限り、できれば一緒にいたいと思ってるはずですよ。それにコリーもあなたになついていきます。僕みたいなペットショップのオーナーの立場から言わせてもらえば、ここにいる犬たちにあなたのような飼い主を見つけてあげることが僕の仕事です。それなのに僕はその逆のことしようとしてるんです。正当な理由なく、簡単に引き受けることはできません。今のところ、あなたは僕にどんな理由も提示してくれていない」

彼女はしばらく僕の顔を見ていた。そこから感情を垣間見ることはできなかった。真実を語るべきかを迷っているようにも見えるし、何か言い訳を考えているようにも見える。もしかしたら何も考えていないかも知れない。僕を説得するための作り話はすでに考えてあって、それを切り出すタイミングを推し量っているだけかもしれない

い。

僕は続けた。「僕の答えはシンプルです。僕はコリーを引き取ってもいいと考えています。ただし、そこには条件が1つだけあります。あなたは僕にコリーを手放す理由を教える必要があります」

そこまで言ってしまうと、これ以上話すべき言葉は見つからなかった。店内は深い沈黙に覆われた。冬の空気のように張りつめた静けさの中に、犬たちの静かな呼吸が聞こえる。それは夜中に響く水滴のように、静けさを一層際立たせた。

彼女は長い間考えた後でとても静かな声で言った。

「私のせいで人が死んでしまいました」

僕は彼女の説明が作り話である可能性を祈った。

僕は小さなカウンターの後ろに座っていた。彼女はカウンターをはさんで置いてあるパイプイスに席をとった。僕は彼女と入れ替わるように一旦席を立ち、ドアに閉店サインを下げてから戻ってきた。それから奥の冷蔵庫からアイスコーヒーを出し、グラスに入れて、彼女と僕の前に置いた。そうしている間に少しだけ落ち着いた気になった。僕はさっきよりも少しだけ深く腰掛けた。「あなたのせいで人が死んだっていうのはどういうことですか？」

彼女の目が天井を見上げた。僕もつられて目を向けたが、そこにはいつもの天井がいつも通りにあるだけだった。

「私にはコウという同じ年の恋人がいました。8年間ずっと一緒にした」

彼女は長い間話した。とても長い間。彼女は、自分が発する言葉と、その合間に生まれる沈黙の重みを推し量るようにゆっくりと話した。僕は、時々小さく相槌を打ち、彼女の話に耳を傾けた。

彼女には大学以来8年間付き合っていた彼氏がいた。コウという名だ。私達は似たもの同士だったの、と彼女は言った。お互いを必

要としていた、と。彼女とコウの出会いには学科対抗のソストボール大会だった。コウは温かい人柄で人望が厚く、自然とそのチームの中心的な役割を担っていたらしい。

「彼は明るくて、裏表のない人でした。気がつくと周りに人が集まっただけで、リーダーになっただけのようなタイプだったんです」と彼女は言った。その言葉は僕に対して語られているが、僕を通り過ぎてどこか遠い場所に向かって話されているように聞こえた。それとかなり遠い場所に向かって。

2人は自然と惹かれあい恋に落ちた。彼女はコウといくとそれまでなかったくらいに安らぐことができた。それは彼女が経験したことの類の感情だった。彼女はいつも誰かに頼られて生きてきたからだ。いつも誰かが彼女に相談を持ちかけた。人生を決めてしまおうような大きな相談から、恋人の浮気に関する相談までその種類は様々だった。友人たちはそのような相談を抱えて彼女の元へやってきた。彼女は人生の割と早い段階から自分のその役割に気付いていた。そう、最初は小学校の時だった。名前は忘れてしまったが、同級生の女の子から恋の悩みを相談されたのが始まりだった。それ以来、彼女にはとても多くの相談が投げかけられた。

「でも勘違いしないで下さい。別にそれが嫌だったわけじゃないんです。みんなが私に相談にくることを嬉しく思ったこともあります。だって誰かに頼りにされるっていうのは、とても幸せなことですよ」と彼女は言った。

僕は小さく頷いた。

「だから私も、それがどんな些細な相談であれ真剣に答えてあげました。私の友達にとって私は頼れる存在だったんです。でもコウと一緒にいると私はそのプレッシャーから開放されました。私たちが一緒にいると、みんなは私じゃなくコウを頼るんです。最初はどうして彼と一緒にいることが、これほどまでの安らぎを与えてくれるのかって不思議に思っていました。ただ漠然とした安心感に包まれている気がしていただけでした。でもしばらくしてわかったんです。

それまでどのくらい誰かに頼られることが自分のプレッシャーにな
っていたかが」

彼女は口元に小さな笑みを作っていた。「別に自慢しようとし
ているわけじゃないんです。ただ事実としていつもそんな役割だっ
たんです」

ええ、と僕は同意した。

「楽しい大学生活でした。付き合い始めて2年後に私たちは同棲を
始めたんです。3年生の9月だったわ。私たちは将来についても話
しました。どちらから言い始めたかは覚えていないけど。でもごく
自然に、当たり前のように私たちは結婚するものだと思っていたん
です。それはコウも同じでした。いつぐらいに結婚しようかとか、
子供は何人つくろうかとかそんな会話を2人でよくしました。将来
を考えているカップルなら誰もがするようなありふれたものだけど、
でもそういう話をしていると本当に幸せな気持ちになることができ
たんです。大学を卒業してすぐに結婚することも考えました。でも
結局は結婚資金をためてから、子供の養育費をためてから結婚しよ
うってことになりました。そういう意味では現実的だったんです、
コウも私も。

彼が就職したのはコンサルティング会社でした。外資系の。人受
けがいい性格だからどんな会社に行ってもうまくやれていたはずで
すけど、彼が選んだ会社は彼にぴったりでした。あっていたんです
ね。とてもオープンな会社でした。それに実力主義でもありました。
1年目だからって見くびられたりすることはなくて、筋道の通った
提案をすれば、それがどんな大きなプロジェクトに関することでも
意見を採用してもらえって言うて喜んでました。私にはそれがう
らやましくて。ほら、私は業務でしたから。いくら海外業務って言
っても、私の意見なんて必要とされていないんです。私に求められ
てるのは、黙々と納期なり金額なりを画面に打ち込むことだけだか
ら」彼女は店内で息を潜めるようにじっとしている犬に静かに視線
を落とした。そして付け加えるように言った。「会社で働いたこと

はあります？」

ある、と僕は簡潔に答えた。

それからしばらく迷った後、従業員が50人程度の小さな会社で営業をやっていたことを彼女に教えた。「つまらない仕事でした。ネジを作ってる会社だったんです。毎日得意先の会社を回ってネジをもっと買ってくれるよう頼むんです。2年働きました。でも何だか虚しくなって辞めたんです。はつきり言ってネジなんてどうでもよかったんですよ。興味なんてありませんでした。どれだけ一生懸命に商品を説明してみても、自分にはいまいちピンとこないんです。わかります？それなのに朝早くから満員電車で詰め込まれて運ばれるように会社に行って、夜遅くまで働いて、夜は上司や社長に付き合わされるなんて馬鹿らしくて、本当に」

そう、本当に馬鹿らしかった。

「気持ちわかります。私も同じだから……」彼女は声を落として言った。

僕は、ええ、とだけ答えた。そして黙った。彼女も黙った。僕はそれ以上自分の身の上話を続けるつもりはなかった。

「それで、いったい何があったんですか？」

彼女はタンポポの綿毛を飛ばすように息をはいた。「私とコウは社会人になってからも上手くやっていました。もちろん学生の時よりも時間的な制限は多いし、仕事上の付き合いも増えたせいで合う時間は減りました。でも幸い2人とも土日が休みだったんです。お金に余裕もできたし。だからその分思いっきり土日を楽しんだの。そんな生活が5年続きました。でも……」

「でも」僕は彼女の言葉を繰り返した。

「でも、……」

彼女の視線は未だにコリーに置かれていた。何かを見ている訳ではない。その視線には目的は感じられなかった。ただ、視線の置き場としての対象を探しているにすぎないのだろ。彼女は無言でコリーを見ていた。彼女の唾を飲み込む音が聞こえそうなくらいに

店内は静まり返っていた。犬の呼吸。彼女の唾をのむ音。僕の呼吸音。まるで映画の効果音じゃないか。

「でも、それが永遠に続くことはありませんでした」と彼女は言った。自分に言い聞かせるような口調だった。「もしかしたら何かがあつて別れることがあるかもしれないって思ったことはありません。そんなの当たり前だから。恋愛に別れはつきものですよ。私もそこまでナイーブじゃありません。」

そして私とコウの終わりはちゃんとやってきたんです」

僕は依然として彼女の話の着地点が見えていなかったが、小さく頷いて話の続きを促した。僕は聞くしかない、少なくとも今のところは。それだけが僕に与えられた選択肢なのだ。そう心の中で考えると、思わず口元が緩んでしまった。まるで、どこかで読んだハードボイルド小説の一節じゃないか、と僕は思った。それだけが僕に与えられた選択肢なのだ。僕に選択の余地はないのだ。

「私は他の人を好きになつてしまつたんです。コウ以外の男性を。その気持ちはあまりに唐突にやってきて、そして理不尽なまでに強力でした。それまで感じたどの感情をも凌駕するくらいの勢いで、私の心を押し流してしまつたんです。」

その男性に会つたのは、ちょうど今から1年前のことでした。会社の先輩に誘われて飲み会に参加する機会があつたんですが、そこにいたのが彼でした。彼はコウとは全く違った雰囲気な男性でした。デリケートな印象つて言えばいいのか：繊細な感じがする人だったんです。そしてとても美しい顔つきをしていました。ただ格好いいつていう感じじゃないんです。女性的な美しさのようなものがあつたんです。

とにかく、私は一目で彼に恋をしてしまいました。性格がどうかを考えている余裕すらないほどに、私は彼に惹かれていたんです。今から思うと、どうしてあそこまで強く惹かれたのかわかりません。でも、その時の私にとって、その力は絶対的でした。それに、とても自然なことに思えたんです。まるで重力を受け入れるような心境

でした。あつて当たり前のもの。存在して当然の力。そんな感じですよ。ごめんなさい、曖昧な説明で。でもとにかく、私は彼に恋をしてしまったんです。それも絶望的なまでに強く」

彼女は自分の気持ちを確認するように頷いて見せた。

「私は自分の気持ちを抑えておくことができませんでした。そんなのは絶対に無理だったわ。彼も同じ気持ちだった。始めてあつた飲み会の途中から、私は彼が欲しくてたまらなかったの。自分でも信じられないけど、ほんとうに。そしてその夜に私は彼と寝ました。とても当たり前のようにホテルに行つて、何度もしたわ」

彼女は完全に自分の世界に入っているようだった。彼女の言葉はもはや完全に僕に向けられたものではなくなっていた。それはもつと内向的で、耳を閉ざしたいほどに個人的だった。それを目の前の彼女は恥じる様子もなく淡々と語り続けている。僕は思った。

彼女はこの話をするためにここにきたのだ。

僕、真実は立ち位置で決まるもの―（後）

彼女は自分自身に向けてこの言葉を語っている。でも語るだけでは足りない。彼女には証人が必要なのだ。だれかがそこにいて、見届けてあげる必要がある。彼女が自分に向けて語る言葉を聞いてあげなければいけない。そしてその役割が僕に降りかかってきたのだろう。

「その後も、私は彼、ユウタと会い続けました。平日の仕事が終わると新宿か池袋で待ち合わせて、そのままホテルに行きました。コウには仕事が忙しいと嘘をついて。

頭ではわかっていたの。自分がどれだけひどいことをしているか。どれほど間違ったことをしているか。そして私はコウを愛していました。彼を氣遣う気持ちは変わらなかつたし、自分の事のように彼を大切に思っていました。その気持ちは心にちゃんと残っていた。でも、それでも私は自分を止めることができなかったんです。私の体がユウタを求めていたの。理性以外の全ての感覚が、私の細胞の全てが、ユウタを求めていたの。

ホテルを出て、家に帰ってコウに会うたびに思ったわ。もう絶対にユウタに会わないことにしよう。明日は絶対に待ち合わせの場所には行かないでおこう、って。何度も。毎朝その決意を持って家を出るんです。ランチの時間だつて、今日はこのままちゃんと家に帰るんだつて思ってるの。でも夕方になって、終業時間が近づくにつれて、体の中が熱くなってくるんです。どうしようもなく。体の中に何か異物があるような感覚ってわかります？ ゆっくりと揺らめく炎のようなんです。それがどんどん大きくなってるのが自分でもわかるの。そして気がつくと、私の足はユウタとの待ち合わせ場所に向かつていたんです。

そんな生活が7ヶ月ほど続きました。ユウタとほぼ毎日ホテルに行つて、それから家に帰ってコウに会う。とても辛い日々だったわ。

何も知らないコウの顔を見ると、どうしようもない罪悪感がのしかかってきた。コウとの関係をきれいに終わらせるべきだと何度も考えた。でもそれさえも出来なかったの。私は彼を愛していたから私はコウを愛していて、同時にユウタを求めている。自分勝手なのはわかっていました。でも、それでも、何も決められないまま時間だけが流れていきました。

そんな生活が8ヶ月くらい続きました。その間、私はコウを裏切っている罪悪感と、ユウタに会った時に感じる満足感の両方を抱えて日々を送っていたんです。でも、とうとう終わりがやってきました」

彼女は唾を、ひとつ、飲み込んだ。

「ばれてしまったんです。ユウタのことが。たまたまでした。私の父が脳内出血を起こして倒れたんです。それで私の家に電話をかけてきたんです、母が。もちろん最初は携帯に連絡がありました。でもちやうど私はその時にユウタとホテルにいたから電話に出ることができなかった。それで母がマンションに連絡をしたんです。事情を知ったコウは会社に電話したの。私はその日も嘘をついていました。残業だつて。でもコウが会社に連絡を入れた時、私はいなかった。それがきっかけでばれちゃったの。適当にごまかす事はできたかもしれない。友達とご飯を食べて電話に気付かなかった、とか言いようはあったと思う。でも、そうしなかった。もしかしたらもう疲れていたのかもしれない。心のどこかには、ばれて欲しいって気持ちがあつたのかもしれない。コウのためにも、自分のためにも、やっぱり真実を言わなきゃいけないってずっと思ってたから。全てを話しました。もう8ヶ月も二股をかけていること。コウを愛している気持ちは変わっていないけど、それでもユウタから離れられずにいること。一つ残らず話したの。コウは静かに話を聞いてくれた。とても悲しそうな表情で、たまに頷きながら。本当に悲しそうだった、本当に」

彼女は自分の発した言葉が空気に染み入るのを待つかのように辺

りを見回した。ドアの外の日差しはさつきよりもさらに薄く平たく引き延ばされたような印象を僕に与えた。冬至が間近に迫っている。昼は短く、夜は長い。まだ4時過ぎだというのに、日差しには夕闇の気配を感じることができた。

彼女は焦点をもう一度調整するかのように僕を見て、それから再び口を開いた。

私、過去と未来の同義性―（前）

母が私に事実を告げた夜からしばらくの間を私は何もせずにした。まるで世界がその回転を止めてしまったような日々だった。もちろん私は毎日仕事に行った。お客と会話だってした。でも私はそこではないどこか別の場所にいた。

ふと気がつくと、意識がどこかを彷徨っていることもしばしばだった。気がついて時計を見てみると、一時間たっていることもあったし、一分しかたっていないこともあった。感覚が途方もなく平たく引き伸ばされているような気がした。全ての物音はゆっくりと私の耳に届き、人々の声は鈍く響いた。そう、まるで深海で聞く鐘の音のように。

朝になると目を覚まし、服を着て、家を出た。極めてシンプルで起伏のない一日。仕事が終わると家に帰って眠りにつく。どうしても必要な時以外は誰とも口をきかなかった。朝と夜に母とは顔を合わせた。言葉も交わした。でも、あの夜以来、病気に関する話題が私達の間で交わされたことはなかった。何度かナオコからの着信が残っていたが、折り返す気にはなれなかった。いつもは何かがあれば、私はナオコに電話をかける。彼女は私の親友であり、全てを分かち合える唯一の人間だから。でも、今回ばかりは無理だった。少なくとも、まだ無理だ、と私は思った。私は自分自身とすら話せていなかったのだ。自分自身を一つの存在としてつなぎとめておけるかさえ確信がもてないでいたのだから。そのような状態で誰かと話をすることは不可能だろう。そう、それがたとえナオコだったとしても。

私はいろんな事を思い出した。奇妙なものだけれど、将来についてはほとんど何も考えなかった。考えなければいけないことはいくらかでもあったはずだ。母がいなくなったらどこに住めばいいのだろうか？この広い一軒家で私一人になるのは嫌だ。どこかにアパート

でも借りればいいのだろうか？母の治療費はどうすればいいのだろうか？回復することはあるのだろうか？挙げていくときりがないほどに問題は山積していた。それは疑いようのない事実だった。それをきれいに並べていけば、万里の長城のような城壁を視界の限りに築くことができただろう。でもそんな状況で、私の頭を占めていたのは思い出ばかりだった。何歳だったか正確に思い出すことはできない。母といった公園の風景。私と母の近くで、同じ年くらいの男の子が父親とフリスビーをして遊んでいる。私はそれをとて羨ましく眺めている。そんなどうしようもないような思い出。そういうものが鮮明に記憶の流砂のなかに浮かび上がってきた。

母の様子にはいつもと変わったところは見られなかった。私以上に動揺しているに違いない。なんといっても実際に癌にかかっているのは母なのだ。死と向き合わなければならぬのは彼女なのだ。それでも彼女は気丈に振舞っていた。私に気を使っていたのだと思う。私の口数が少ないことにも気がつかない様子で、私に話しかけてきた。余りにも普通すぎて、もしかしたらあの夜に母の口から告げられたことの全てが私の頭の中だけで起こったことなのじゃないかと思えてくるほどだった。でももちろんそんなことは、ない。癌細胞は、今この瞬間もせっせと彼女の体を蝕んでいる。突然私は癌細胞が憎くてたまらなくなった。ついさっき掘り当てたばかりの井戸から湧き出る水流のように、私の中に憎しみが湧き出てくるのが感じられた。どうして私の母が癌にならなければいけないのだろうか？父親が他界した後、彼女は懸命に働いて私を育ててくれた。文字通り眠る時間を惜しんで働いたはずだ。それでもしなければ、女手一つで子供を育てるなんて無理だろう。そしてやっとの思い出ひとり立ちさせた娘。これからは自分のための時間が持てたはずなのに。そう考えると怖いくらいに憎かった。そして私は残されてしまう。母がいない世界に、たった1人で。

私、過去と未来の同義性Ⅰ（中）（前書き）

明日から2日に一回のペースでアップします。
感想、アドバイスなどあればお待ちしてます

私、過去と未来の同義性―（中）

ゆるい坂道を下るように日々は流れていった。私が母の病気を知ってからもうすでに3ヶ月が経とうとしている。12月の富山。空は分厚い雲に覆われる日が続いていた。

最初のショックは過ぎ去ったが、私の心は錨をさげられたように重たかった。でもいつまでもこのままではいけない。母に残された期間は、私にとって彼女と過ごすために残された期間でもあるのだ。

私は意識的に母親と過ごす時間を増やした。特別なことをした訳ではない。ただ、いつもより少し早く帰ってきたり、お茶を飲みながら話をしたり、買い物にでかけたり、そんな感じだ。母の態度は相変わらずだった。彼女は健康そのものに見えたとし、表情は以前にも増して活力が溢れていた。それは一つの事実を私に告げていた。彼女は病気を受け入れたのだ。自分の運命を受け入れたのだ。私は彼女の意志を尊重しなければいけない。もしも彼女が残された時間を後悔することなく生きたいのであれば、楽しみたいのであれば、私だけがいつまでも暗い顔を引きずっている訳にはいけない。

そういえばナオコと最近話してないな、と私は思った。彼女と話したい。そう思って携帯をバッグから取り出して、電話をする。この時間なら彼女はもう家に帰っているはずだ。でも彼女は電話に出なかった。10回目のダイアル音が消える前に私は電話を切った。もうしばらくしてからかけなおそう、と思いベッドに横になり目を閉じるとすぐに深い眠りがやってきた。

決断をする必要がある。母の病気を知った日から、私を悩ませているもう一つの問題。私は母にひみつを伝えるべきなのだろうか？私は頭の中で何度も彼女に真実を打ち明ける場面を想像してみた。お母さん、実は私は同姓しか愛せないの。神妙な面持ちで話すべき

なのだろうか、それともふざけた感じのほうがいいのだろうか。どれだけ考えても結局は堂々巡りに終わってしまった。母がどのような反応をするか私にはわからなかった。まったくといっていいほどわからなかった。母親として、彼女は私をありのままの姿で受け入れてくれるだろう。それに関して疑いの余地は無い。だからと言って、私が抱えるこの特殊性に関して、彼女が何らかの現実的な力を及ぼせることはできない。彼女の言動によって、私の性的趣向が変わるわけではないのだ。そうだとすると、私は死に瀕する母親に必要な心配を与えるだけになってしまう。彼女は死の床で、同姓しか愛せず子供を作る事もできない娘の将来を嘆くことになるだろう。その考えは私をとて悲しい気持ちにさせた。その一方で、娘の本当の姿を知らずにこの世を去っていくことを母は決して望まないはずだ。実の娘がどのような人間なのか、母親には知る権利がある。

思考がいつもと同じ経路を辿り、同じ壁にぶつかる。今日は仕事に向かう車の中だ。何十回、何百回と辿った道だ。駐車場に車をとめて、小さく息を吐く。

やっぱりナオコと話をしなきゃ、と私は思った。彼女と話せば決断を下すヒントが得られるかもしれない。

その夜もナオコは電話にでなかった。残業しているのだろう。地方の花屋で働く私と違い、ナオコは東京の貿易会社で働いている。月末が近づくと、終電で帰ってくる日が続くような生活だ。私は電話ちよーだい とメールをして、ベッドに潜った。

毎日顔を合わせる私にとっては、母の様子は以前と全く変わらないうような気がしていた。でも従弟の結婚式で挨拶を交わした親戚の何人かが、母に向かって「やせたんじゃないの？」と言葉をかけた。もちろん彼女たちに悪気はない。それらは褒め言葉として意図されたものであるし、通常であれば母くらいの年代の女性がやせたと言われれば喜ぶだろう。しかしその言葉は針のような鋭さで私を刺し

た。やっぱり癌は確実に母の体を蝕んでいる。いくら目に見えなくても、いくら些細な症状から目をそむけようとしても、毎日癌は進行し、母は定められた終着点に向かって着実に進んでいるのだ。

2次会が終わったのは夜の7時だった。従弟は友人や何人かの親戚たちと、3次会へと向かった。私は母と一緒に会場を後にして家に向かった。2人ともお酒を飲んでいなかった。母は自分が運転すると言った。

「いいよ、私が運転するよ」と私は答えた。「私もお酒飲んでないしさ」

「でも疲れてるでしょ。昨日まで仕事だったんだし。お母さんが運転するから目でもつむっていきなよ」

「大丈夫。なんとなく運転したい気もするし、私がするよ」と私は言った。

じゃあお願いね、と母は答えた。

会場があつた市内から私の家までは車で30分ほどだ。国道をまっすぐに南下するだけの単調な道だ。

「少しだけ寄り道してもいい？」と私は母に尋ねた。

「いいけど、どこに？」と母は私に尋ねた。

「珍しく天気もいいし、少し夜景でも見たいなって思って。まだそんなに遅い時間じゃないしさ」

「いいわよ」と母は頷いた。「冬は空気もきれいだしね。きれいな夜景が見れそうね」

私はゆっくりとハンドブレーキを解除し、アクセルを踏んだ。

私、過去と未来の同義性―（後）

土曜の夜の国道はスムーズに流れていた。全ての車が制限速度を15キロ程オーバーして走っている。「東京の渋滞ってひどいんだから」とナオコは顔をしかめて言っていた。といっても電話だったので本当にしかめ面だったかはわからない。でも私の頭の中での彼女はおもいきりしかめ面をしていた。私は目の前の道路に再び意識を向けた。国道がまっすぐに続いている。信号がいくつかみえる。青のものもあれば、赤のものもある。私は父のことを考える。お父さんが生きていたら母の死を少し違った風にとらえることができたのだろうか。わからない。お父さんもやっぱり泣くのだろうか。私と母がそうしたように。わからない。お父さんが生きててくれればいいのに、と私は思った。これまでにないほどひどく切実にそう思った。

国道を右折して高台へと続く道を進んだ。それほど高い山ではないが、市街地を見渡すには十分な高さで夜景スポットになっている。途中で何台かの車とすれ違った。頂上の駐車場には数台の車が止まっていた。おそらくカップルだろうが、中に人がいるかはわからない。私はそれらの車から少し離れたところに車をとめた。そしてしっかりとハンドブレーキを引いた。そして「着いたよ」と母に声をかけた。でも母は眠ってしまっていた。考えに没頭していて気づかなかったが、どうやら出発してすぐに眠っていたようだ。母はとても気持ちよさそうに眠っていた。私は諦めて一人で少し歩くことにした。そしてマフラーを巻いて外へ出た。駐車場から見晴らし台までは30段ほどの階段を上る必要がある。車に鍵をかけて階段へと向かった。

冬の空気はとても澄んでいた。まばらに設置されている街灯の明かりは、いつもより透明度を増したように輝いていた。私は冬が大好きだ。私がそういうと、ナオコを含めた友人たちは首を傾げる。

「だってほとんど毎日曇りだし、雨も多いし。1月、2月になると雪だって降るんだよ。どうして好きなの？」と彼女たちは聞く。「夏のほうが全然いいよ」

確かにナオコたちの言う通りだ。雨や雪の日が大半を占める冬を好きだという人間は北陸にはあまりいない。それでも私は冬が好きだ。雪が降った後の冬の空気がたまらなく好きなのだ。分厚い雪雲から降る雪が空気中の埃をすべて落としてくれる。空気はどこまでも透明で、夜の明かりは夏とは比べ物にならないほどに輝いてみえる。そんな夜にコートを着込み、マフラーを巻き、手袋をし、夜景をみに出かけるのが私の楽しみであり、富山が好きな理由でもある。私は展望台へと階段を上った。地面には昼間の雨の気配がまだ残っていた。滑らないように、注意して歩いた。

展望台に人影はなく、寂しげに立っている1本の街灯が展望台の一部をやけに明るく照らしていた。私はその明かりを通り過ぎ、暗がりになっていく場所へと歩いた。ちょうど展望台の先端になっている部分だ。正面の木はカットされ、夜景がみやすいように視界が開けている。ベンチが一つ置かれ、その少し先にフェンスが設置されている。私はフェンスに両肘をのせて身を預けた。さっきまで私と母がいた市街地が見える。駅前にあるビルもよく見える。駅から遠ざかる電車の明かりも見えた。それらの明かりが空を埋める分厚い雲を少しだけオレンジ色に染めている。そんな光景をみながら、私の心は再び母と彼女の病気に向けられていた。別に何か新しい結論にたどりつける訳でもない。それでも考えずにはいられない。

突然後ろに何かの気配を感じた。それもただの気配ではなかった。そこには私の背中を突き刺すほどの悪意が含まれていた。はっとして後ろを振り返ると、その男は、青白く輝く何かを振り上げていた。ナイフだ。全身が一瞬で凍りついたようにこわばった。両足がその場にはりつけられたように動かなくなっていた。男は躊躇なくナイフを振り下ろした。そしてナイフは私の胸を突き刺した。私は叫び声をあげることすらできずにその場に倒れた。右頬に触れた地面が

やけに冷たく感じられた。薄れてゆく意識の中で私は男の姿を探した。男は逃げる様子もなく、ただ立ち尽くして私を見下ろしていた。右手にはたった今私の胸を刺したナイフが満足そうに光っていた。私は男の顔を見ようと視線をあげた。

そして私は見た。ぼやけていく視界の中に、あの男の顔を。

僕、可能性としての選択肢

そう、別の人生を送ることもできた、可能性として。

他の道を選ぶこともできたのだ、可能性としては。

でもそうしなかった、現実として。

僕は世間で一流といわれている私立大学を卒業した。在学中は割と真面目に授業を受け、割と真面目に勉強した。単位もとった。卒業もした。そして適度に遊びだつてした。一流企業に就職することはできたはずだ。僕が就職活動をした2000年は、バブル崩壊の余波から経済が持ち直そうとしている頃だった。失われた10年。それによりやく別れを告げた2000年。新しい世紀の幕開け。僕が就職活動をしたのは、そんな時代と時代の狭間のような時だった。人々は新しい何かに期待していた。そんなちよつとした高揚感が世間にうすい霧のように漂っていた。それと同時に、失われた10年の間に消え去ってしまった自信を再び手にすることができのかに確証を持てずにいた。もしかしたらそれまでの10年間は特殊な期間なんかじゃないのかもしれない。それこそが我々本来の、すなわちこれからの姿なんじゃないだろうか？そんな感じた。

僕が選んだのはネジの製造会社だった。「アネックス」というのがその会社の名前だった。ネジを作って売っている会社にしてはやけに小洒落ているなというのが第一印象だった。50人程度の従業員を抱える小さな会社だ。その内の30人は工場で働いている。残りは営業と業務だ。僕は営業として採用された。

面接に行ったとき、社長は僕のレジメを物珍しそうに眺めた。それから顔をあげて、火星人でも見るような目で僕を見た。富岡社長は僕にどうしてうちみたいな会社を受けにきたのかを尋ねた。「何かとんでもない問題を持っていて他は全部落とされでもしたのか？」と彼は言つて、にやつと笑った。でも不思議といやらしくはない笑い方だった。

僕は彼の冗談に微笑んでから答えた。「いえ、何にも問題はありません。ただ、レジメに書いてあることは全部ウソなんです」

社長の目が丸くなった。「おいおい、冗談だろ」

「ええ、冗談です。心配しないでください、そこに書いてある学歴に間違いはありません。学生証だって持ってます」

常識で考えれば、こんな冗談は面接の第一声で発するべき言葉ではないだろう。リスクが多すぎる。でも社長はすぐ気に入ってくれた。彼は大声をだして笑った。そして僕にはわかっていたのだ。彼が好意的に反応するだろうことが。その冗談の後、面接は非常に寛いだ雰囲気で行進した。そして面接の終わりに、彼はその場で僕を採用したいと言い、僕はそれを承諾した。

当時僕が思っていたのは、結局のところどこで働いても同じだということだ。それがどんな大企業であろうと、官庁であろうと、東京の下町の今にも崩れそうな日の当たらないビルの2階にあるような零細企業であろうと、やることに大きな差はない。動かすお金に差はあるだろう。国や、経済に与える影響に差はあるだろう。ただ、純粹に労働作業として比較をした場合は、そこに差は生まれない。僕たちは朝になると会社に行き、そこで夜遅くまで言われたことをやり続けるだけだ。

それが働くことなのだから。

僕の目の前に座る女性は淡々と彼女の過去について語る。まったく知らないといってもいい僕に向かって赤裸々に事実を並べていく可能性として彼女に与えられていた選択肢。できたかもしれないこと。起こったかもしれないこと。実際に選んだ行動。実際に起こったこと。それらのすべては可能性としてはどこまでも均等なのだ。実際に起こった現実と起こりえた可能性を隔てるのは一枚の薄い膜でしかない。すべての物事は起こりえる。しかし未来の地点から見た時、実際に起こったことと起こったかもしれないことの間には決

定的な違いが存在している。

そしてその違いは時に人の生死を分けてしまうことだってある。
僕の前に座る女性の場合のように。

ナオコ、世界の基盤はどこまでも脆い―（前）

2人はキッチンテーブルに向かい合って座っていた。

ナオコが話し終えてからずいぶん長い間、沈黙が部屋全体を包み込んでいた。コウは下を向いて身動き一つしなかった。彼の表情は見えない。それでも彼が激しく混乱しているのは明らかだった。その感情は空気をつたい、ナオコに届いていた。コウはどんな気持ちでいるのだろう。彼女はできる限りの想像力を働かせて、彼の気持ちを推し量ろうとした。でも無駄だった。自分の気持ちさえわからない私に、コウの気持ちがわかるわけがない。

やがてコウはゆっくりとナオコに顔を向けた。「俺は…それでもナオコを愛してる。すごく悲しくて、すごく傷ついたけど、でもそれでもナオコと一緒にいたい。」

だけど、そのためには約束してもらう必要がある。もう、2度とその男には会わないって、約束してもらう必要がある。そしてナオコはその約束を絶対に守らなきゃいけない。もし、もしも、その男からどうしても離れられないなら、そう言ってもらう必要がある。それだけははっきり言って欲しい。俺か、その男か。選んでもらわなきゃいけない」

彼の頬には涙がつつたっていた。ひとつ、ふたつ、とききれいな線を残してテーブルに落ちた。ナオコは頷くことしかできなかった。コウに全てを告げてしまうことで、何かが明らかになるかと思っていた。自分を追い込むことで、答えがでるかもしれないと思っていた。それともコウが歩き去ってくれることを期待していたのだろうか？それすらもわからない。

ナオコは何も答えられなかった。何か言わなくてはいけないと思い、発すべき言葉を思い巡らせてみた。でもそのどれもが彼女の本当の気持ちを伝えてくれそうな言葉ではなかった。私が考えている事と口にする事。そこには何か決定的な差があるように思えた。ど

んな上手い言葉を並べても、それらしい表現を使っても、それらは、その場に合わせて合成された人工物のようなものでしかないのだろうか？ 結局は何を言っても私の心をコウに伝えることなんてできないのだろうか？

わからない。

「わからない」と声に出してみた。

コウは同じ姿勢でナオコを見ている。その表情から読み取れるのは悲しみだけだ。裏切りに対する怒りは見えない。私の顔はコウの目にどう映っているんだろう。そんな考えだけが次から次へと心に湧いてくるだけで、肝心の問題に関しては結論がでるような気配すらない。

「…」

コウの声が聞こえた気がしてナオコが聞き返した。

彼は少し間を置いてから言った。

「一週間。」

待つよ…一週間だけ待つよ。だからそれまでに、決めてくれ」
ナオコには頷くことしかできなかった。

その日2人は別々に眠った。ナオコはベッドで、コウはソファで寝た。久しぶりに1人で眠るベッドはやけに広く思えた。そして電気を消した寝室はいつもより暗く感じた。ナオコは目を閉じて物音に耳を傾けてみた。でも何も聞こえない。午前2時。時間だけが静かに流れている。すぐく泣きたい気分だった。でも涙は出てこなかった。何に対して私は涙を流せばいいのだろうか？ 2人を愛してしまった自分を恥じてだろうか。それとも、2人に愛された自分の運命を嘆いてだろうか。コウを裏切った事に対してだろうか。

結局は自分の為にしか泣けないのだ。思考がそこまで巡って始めて、ナオコの目には涙が溢れていた。

ナオコ、世界の基盤はどこまでも脆いー（中）

翌朝、ソファにコウの姿はなかった。テーブルの上には一言メモが残されていた。仕事に行くよ。

それから一週間、ナオコとコウが顔を合わせる事はなかった。コウは朝早く出社し、そして深夜に帰ってきているようだった。そうしようと思えば、コウに会うのは簡単だった。ただ起きて待っていればいいだけだ。でもナオコはそうしなかった。コウは私に時間を与えてくれたんだ。今はしっかり考えて、そして決めなきゃいけない。

他の事は何も考えられなかった。業務画面を見ている時、電車に乗っているとき、食事をしている時、彼女はコウとユウタの事だけ考えた。あらゆる側面から何かしらの結論を導き出そうとした。コウとユウタ。どちらを選ぶべきなのだろう。ユウタを選ぶ事はコウとの別れを意味する。でもナオコにはコウとの別れがどうしても現実を起こりうる事として実感ができなかった。あまりに長い間コウは彼女の人生の一部であり続けてきた。彼と別れることは自分の体の一部を切り落としてしまうようなものだ。だからといってユウタに会えないなんて絶対に嫌だ、とナオコは思った。体の全細胞が彼を欲している。ナオコはそれを感じることができた。そう、まるでお互いの重力に引っ張り合われている惑星だ。遅かれ早かれいずれは衝突する。会う回数を重ねるたびに、その重力は強まっていた。現に、こうして悩んでいる間でさえ彼女はユウタを欲していた。早く一週間が過ぎ去ればいいとナオコは思った。どれだけ考えたって正しい結論なんてでない。

月の上を歩いているような一週間だった。気を抜くと体が浮いてしまいそんな気がした。口にするもの全てが、ただ食道を落下して

いっただけだった。結局は体から排出されてしまう食べ物。必要な栄養分だけを抽出され、そして最後は不要物となり体外に出てくる。彼女が歩いていたのはガラスの通路だった。一歩間違えば彼女の足場は崩れ落ち、彼女は底のみえない暗闇に落ちてしまう。そこはどこまでも不安定で脆い世界だった。

ナオコ、世界の基盤はどこまでも脆い―（後）

あの夜から一週間。ナオコは重い足を家に向かって動かした。今日こそ、何かしらの結論を出さなければいけない。

玄関にはコウの靴がきちんと揃えて並んでいた。彼はキッチンテーブルに両手をのせて座っていた。先週と同じ場所だ。ナオコがそっとドアを開けると、彼は少しだけ口元を緩めて微笑んだ。そして、おかえり、と言った。「今日は早く帰ってきたんだね」

ナオコはうん、と頷いてから言った。「先に洗面所に行ってきた方がいいかな？」

「もちろん」とコウは答えた。「どこにも行かないよ」

ナオコは洗面所で手を洗った。そして鏡の中の自分を覗き込んだ。そこに映る自分はひどく不確かな存在だった。10分先の未来さえもわからない一人の女。自分がくださなければいけない決断の答えさえわかっていない女。その一方で早くこのジレンマから開放されたいと望んでいる女。そんな複数の人間が、曖昧に1人の人間として存在している。それもただの一人の人間ではなく、「私」として存在しているのだ。

リビングではコウが同じ場所に座っていた。ただ、テーブルには缶ビールとグラスが2つ置かれていた。ナオコが向かいのイスに座ると、コウは片手でプルタブを引き、グラスにビールを注いだ。心地のよい音が、ことごとく、と響いた。こんな時でも、おいしそうな音は変わらない。2人は無言で乾杯をした。

一口で半分程を飲んだグラスにビールを注ぎながら、コウが言った。「わかってると思うけど、今日で一週間だ」そして一杯になったグラスから今度は少しだけ飲んだ。「考えてくれた？」

「考えたよ。すごくたくさん。これでもかかってくらいに考え続けた。でも、…」

でも、どれだけ考えても答えはなくて。今日、コウの顔を見て、

今日感じた気持ちに正直な決断をしようって思ってた」

「そっか。おれもナオコのことばかり考えてたよ。今になって俺が出来ることなんてないんだけどさ。すべてはナオコの気持ち次第だから。でも、もつとああしておけばよかったとか、あんなことしなきゃよかったな、とか、そんなことばかり考えちゃってさ」

うん、とナオコは答えた。

コウは一度深く呼吸をして言った。「で、結論は？」

コウの目は真っ直ぐにナオコを見ていた。その目は不安に溢れていた。ナオコがこれまで一度も見なかったものだった。そして同時にそこには一抹の希望が隠されていた。ナオコが自分のもとに留まってくれる、という微かな期待をコウは抱いているのだ。ナオコは心が針金で締め付けられているような気がした。私は彼の期待には応えられないのだ。

ナオコは言った。

「私はコウが好きだよ…本当に。もう何年も一緒にいるけど、でもその気持ちは変わってないの。それは信じて欲しい」

「でも」とコウは静かに言った。

「でも・・・」とナオコは続けた。

「でも今、ユウタと顔を合わせなくなるのはどうしても無理。私にはできない。コウと別れることも嫌だよ。もちろん。このままだと別れたらと思う。でも、どうしても分からないけど、ユウタに対してどうしようもなく引かれるの。何か物理的な力でも作用してるんじゃないかと思うくらい。こんな気持ちを持ちながら、コウと一緒にいることはやっぱりできないんだと思う。私にはその資格がない。だから…」

「だから」とコウはナオコの言葉をなぞった。

「だから、別れたほうがいいと思う」

「別れたほうがいいと思う」とコウは再び彼女の言葉を繰り返した。彼の脳に、ナオコの言葉を染み入らせるように。

ナオコは黙った。

コウも黙った。

時間が静かに経過した。こんな時でも時間は均等に流れているのだ。平等に、そして不公平に。

「そうか」とコウはしばらくして言った。

きつといろいろな状況を頭の中で繰り返し想像してきたのだろう。彼の声は静かだったし、顔からは激しい感情を読み取ることはできなかった。

「そうか」と彼は繰り返した。

そしてそれから半年後に彼は自殺した。

僕とナオコ、生と死は対極であるけれど不平等な存在である（前書き）

個人的な理由で時間があいてしまいましたが、少しずつアップし始めます。

僕とナオコ、生と死は対極であるけれど不平等な存在である

「コウは自殺してしまいました」とナオコは言った。

僕は黙っていた。どんな言葉が適切で、どんな言葉が不適切になるのか見当もつかない。

「私と別れてから借りたマンションで首を吊ったんです。彼の同僚が第一発見者でした。何日か無断欠勤が続いていたらしくて心配してやってきたみたいです。それで管理人に連絡して鍵をあけて中に入って彼が首を吊っているのを見つけたんです。机の上にはメモが残されていました。彼の両親と、そして私あてに。

私に知らせてくれたのは彼の両親でした。もちろん面識はありません。彼の実家にも行ったことがあったから」

僕は黙っていた。

「彼が自殺をしたと聞いたとき、私はそれほど驚きませんでした。もちろん悲しみはこみあげてきました。でも心のどこかでは、やっぱりかって思う気持ちも合った気がします」

彼女はしばらく黙った。口にした言葉が適した着地点を見つけるのを待つように。

「生と死の違いについて考えたことはありますか？」と彼女は言った。

生と死？

ない、と僕は答えた。

生と死の違いなんて考えるまでもない。生きていることと死んでいること。街を歩く人々と墓に眠る人々。そこには絶望的なまでの差がある。生と死は磁石のN極とS極のようなものだ。対極として存在している。

「そうですね、普通であれば考えるまでもないことですよね。生と死、つまり生きている状態と死んでいる状態は比べるまでもないほどに異なる存在です。まったくの正反対です。愛と憎しみ、プラ

スとマイナス、生と死。

でも私は違うと思います。愛と憎しみであれば、その二つの感情は性質として対極に存在していて、同等の存在です。プラスとマイナスも同じです。対極をなす一つの性質をのぞいては同等なんですよ。生と死は違います。動いていることと動いていないことだけの違いではありません。その2つは不平等に存在しています、とても。それは一方通行なんです。生から死へとつながる道はあるのに、死から生へとつながる道はありません。愛は憎しみに変わるし、憎しみは愛に変われますよね。それとは全く違います。対極ではあっても、同等ではないんです」

消えてしまうことはどうなんだろう、と僕は思った。姿を消してしまった僕の彼女。「消失」は生に近いのだろうか、それとも死に近いのだろうか。そこには戻ってくるための道もちゃんと用意されているのだろうか。

「私のくだした決断によって、人が生の側から死の側へと境界線を越えてしまったんです。今となっては私が何をしてモコウは戻ってきません。死の世界にどっぷりと両足をつけて存在しています」

僕は頷くこともせずに彼女の話を聞いていた。

「もしも、もう一度やり直せるとしたらどうするだろうって考え続けています。同じ状況にたてば、間違いなく同じ選択をするはずですよ。きつと。それほどまでにコントロールできない衝動をユウタに對して抱いていましたから。」

でももしもコウが自殺するとわかっていたらどちらを選んだんだろうって考えるんです。私がユウタを選べば、コウは自殺する。そうわかっていたら私はどうしたと思いますか？」

そんなことを聞かれてもわかる訳がない。

わからない、と僕は答えた。

ナオコは続けた。

「私はそれでもコウのもとを去ったと思います。自分の幸せを犠牲にしてまで、誰かのために何かをしてあげることにはできません。私

だけじゃなく、誰でもそうだと思います、大抵は。私にはわかっていたんです。コウが無謀なことをするかもしれないって。だからこそ彼の自殺を聞いたときそれほど驚かなかったんだと思います。ひどい女ですよ。でも結局私たちは、私たちのいいようにしか物事を解釈できないんだと思うんです。例えば、何か不幸な事が起こるかもしれないっていう予感がしたとします。でも、実際に何かが起こるまで、私たちはその予感に目を向けないんです。それがよくない結果を暗示しているから。悪い予感に対峙する勇気が私たちに備わっていたとしたら、人間は違った生き方をしているはずです。世の中はこれほどまでに不幸じゃないはずですよ」

僕は彼女の言った事を頭の中で整理しようとしてみた。彼女の言葉の部分部分は確かにある種の真実を語っているのかもしれない。彼女の言葉を聞いていると、それが鋭く真実をついついていっているような感覚はある。でも、だから彼女が何を言おうとしているのかはわからない。そこには一貫性が見いだせない。少なくとも僕には。

「とにかく私には犬を飼う事なんてできません。コウをあちら側に送り込んだ人間に、自分以外の命を預かる資格なんてないんです。私は後悔はしていません。でも責任は感じています。その2つは別物です。私は彼を死に追いやった責任を負っていきます。コリーは私の感情にとっても敏感です。私が悲しんでいる時には優しく体を寄せてくれるんですよ。でも、それはコリーにとっての幸せとは言えません。私は2度と同じことはできません」

彼女の言葉はそこで終わった。僕はしばらく彼女の様子をうかがっていた。でも、語るべき事を語った彼女の口がそれ以上開く事はなかった。

「事情はわかりました」としばらく後で僕は言った。「もう一日だけ考えさせてください。コリーはこのまま預かるんで、明日もう一度同じ時間にお店にきてくれませんか？」

ナオコは特に表情を浮かべずに、はい、とだけ答えて店を後にした。

彼女の去った後には、苦虫をかみつぶしたような空気が残された。
生と死は対極だけど不平等なものだと彼女は言った。

僕たちに悪い予感と対峙する勇気があれば世の中はよくなると彼女
は言った。

私、なくてはならないもの（前）

母が心配そうな顔で私を見下ろしていた。さっきまで肌を刺していた寒さはなく、暖房のきいた空気が私を包んでいた。意識がそこらじゅうに散らばっている。まずはそれらを集めなければいけない。私はできる限り大きく息を吸い込んでからゆっくりと吐き出した。私は病院のベッドに横になっていた。

「大丈夫？」と様子をうかがっていた母が心配そうに聞いた。

私は微笑もうとしたけれど、上手く口元が動かなかったの、ただ小さく頷いた。私の手を握っていた母の手が震えていた。

「何かあったんじゃないかと思って心配したのよ、本当に。びっくりさせないでちょうだい」

何か声をかけてあげたかたかったけど、上手く声が出てこなかった。

「お医者さんと呼んでくるからちょっと待ってなさい」といって母は病室から出て行った。

母を待つ間、私は何が起こったかを思い出そうとしてみた。頭の中に残っているいくつかの場面が時間軸を縦横無尽に散らばっているような気がした。私は大きく一つ息を吐いた。順を追って思い出してみよう。

結婚式の後で母と夜景を見に行くことにした。助手席で眠ってしまった母を残して一人展望台へ歩いた。展望台はとても寒かった。フェンスに寄りかかって夜景を見ている時に後ろに誰かの気配を感じた。そして・・・私ははっとして胸に手を当てた。私は胸を刺されたんだ。

脇の下に冷たい汗が吹き出してきた。

そうだ、誰かが私の胸を刺したんだ。白く光るナイフがこの私の胸を突き刺したんだ。ナイフが胸に突き刺さる感覚はまだ体に残

っている。

でも私の胸に傷跡はなかった。刺された跡は何一つない。刺された場所を指先で撫でてみた。痛みはない。昨日の夜に鏡に打った体と変わりはない。スムーズな20代の肌があるだけだ。私は確かに刺されたはずなのに。私の脳が必死に回転して論理的な説明を探しているのを感じた。でも何かしらの結論が導かれる前に、病室のドアが開き、医者連れられた母が戻ってきた。

「意識が戻ってよかったですね」と医者は言った。30代前半の女医だった。化粧気はないけど、とてもきれいな肌をしていた。どことなくナオコと似た雰囲気がある。きちんと化粧をすれば映えそうな顔立ちをしている。ただ私のタイプとはいえないけれど。

「突然倒れたそうですね。お母様がすぐに気づかれてよかったですよ。幸い転倒時に頭は打っていなかったようですが、この寒い中で長時間気を失っているのは危険ですからね」

違う、私は刺されたんだ

「とにかく、様子を見るために教一日は入院してもらいます」と女医は言った

誰かが私を襲ったんです

「一晩見て問題がなければ明日には退院できますよ」

私は必死で状況を説明しようとした。私は刺されたんだ、と叫びたかった。でも声は出てこなかった。音声だけが私の喉で濾過されてしまったように、軽い空気が口から漏れただけだった。お母さんと叫ぼうとしても結果は同じだった。

私は声を失っていた。

私、なくてはならないもの（中）

「寒いところで倒れてたからですか？」と母は女医に聞いた。

彼女は顎をひいて考える仕草をみせてから言った。

「外傷がないため、頭を打ってはいません。だからといって寒い所で倒れていたからといって、声が出なくなるという話は聞いたことがありませんね。通常、精神的なショックによって一時的に声がなくなることはあるかもしれませんが。もしかしたら、そもそも倒れた原因と関係しているのかもしれないですね。以前にも、娘さんが突然気を失ったことはありましたか？」

「いえ、一度もありません。少なくとも私と一緒にいるときに娘が突然倒れたことはないです」

女医は紙とペンを内ポケットから出して私に渡した。

「書くことはできるかしら？」と彼女は優しく尋ねた。昨日初めてペンを握ることを覚えた子供に話しかけるような感じの話し方だ。声が出ないからといって私が愚かになった訳ではないのに。

「何か変わったことはありませんか？」

私は右手でペンを受け取った。力はしっかり入る。文字を書くのは問題なさそうだ。でも何を？ いったい何をどう書いたら女医と母の2人が信じてくれるだろうか？ 胸を刺されたんだ、と書いたとしても、実際その傷跡は消えてしまっている。どうかんがえても2人を納得させられそうな説明は浮かんでこなかった。結局私は諦めて、「特に何も無い」とだけ書いてペンと紙を女医に返した。

女医は先ほどと同じように顎をひいて考える仕草をみせてから母に向かって説明した。「正直にいつて原因はわかりません。原因がわからないので、今の段階で治療をすることはできないということになります。ただ、痛みがあるわけでもなさそうですし、話を理解することはできています。やはり一日様子を見てみるしかないかと思えます」

わかりました、と母は答えた。

母の答えを確認すると、彼女は私に向かって微笑んだ後で部屋を出て行った。

母は私と一緒に病室に泊まるといったが、私は「一人で大丈夫だから、お母さんは家に帰って休んでいいよ」と伝えた。母は納得しない様子だったけれど、特に文句も言わずに了解してくれた。口の聞けない人間と言い争いをすることはできない。世の中には話せなくて得することもある。

母が帰って私は病室に一人になった。いざ一人になってみると、母がいたことでどれだけ気が紛れていたかが実感できた。もともと簡素な作りの病室が、さらにそっぽをむけてしまったような気がした。でも私には考える時間が必要なのだ。一人でじつくりと、今日自身の身に起こった出来事を検証してみなきゃいけない。私はいくつかの可能性を頭の中で並べてみて、そのなかから最もらしいものをいくつか選んで、母がおいていった紙に書き出してみた。

まず最初に考えておくべきなのは、全ては私の見た幻覚にすぎなかったという可能性だ。私は何らかの健康上の理由で倒れてしまい、その無意識の状態のなかで夢をみたか幻を見ただけかもしれない。

「?全ては夢または幻覚だった」と私は書いた。

実際に誰かが私を襲おうとしてナイフを振り上げた所で私は気を失ってしまったという可能性もある。刺されるという恐怖が私の心実際に刺されたような記憶を焼き付けたのかもしれない。

「?トラウマティックな体験。(誰かがナイフを振り上げて私を襲おうとした?)」と私は少しだけ隙間を空けて書き足した。

そして最後は、本当に私は誰かにこの胸を突き刺されたという可

能性だ。ナイフは実際に私の胸に向かって振り下ろされて、そして私の胸をついた。実際に血は流れていない。そのナイフは私の肉ではなく、何か別の物に突き刺されたのかもしれない。

「？ナイフは私の体ではなく何か別の物を突き刺した。」

突拍子もない話のようにも聞こえるけれど、ひとまず可能性として仮定してみる価値はある。私は病室に一人で横になっているだけで、声がでないから友人と電話で話す訳にもいかない。時間はいくらでもある。

実際に紙に書いたものを読み返してみるとどれも同じくらいにばかりに思えた。現実的かどうかというメジャーで測れば、？がリストの一番上にくるだろう。しかし、私は刺された感触を確かに記憶している。ナイフは間違いなく振り下ろされ突き立てられた。痛みが衝撃波のように胸から体の端へと駆け抜け、それが弾ける。そこで痛みは消える。後はすべてが非現実的な色を帯びて、私は客観的に私が教われた場面を傍観するしかなかった。それはどう考えても、幻覚や夢とは違う種類の現実性を伴って私の中に存在していた。これが本当の出来事でないならば、いったい何が本当だと呼べるだろうか。そう考えると、？の可能性も排除しなければいけない。自分の中に焼き付いているこの感覚を信じるとすれば、私は本当に何らかの形で刺されたんだと考えなければ行けない。

私はもう一度？を読み返してみた。

「？ナイフは私の体ではなく何か別の物を突き刺した。」

そして首を振った。まるでスタートレックの世界だ。昔見たエピソードに思考と現実を同一とみなす種族が登場していた。彼らにとつては考えることこそが力であり、それは現実と同等なのだ。なんていったっけな？そう、たしかトラベラー、旅人と呼ばれていた気

がする。私は子供の頃、このエピソードが好きで何回も見ていた。考えが、そのまま直接的に現実的な影響力を生む世界。そんな世界に住めれば、わくわくするような体験ができるのにと子供ながらに考えていた。もちろん、当時はその考えが現実となることはなかった。しかし、今こうやって現実に、現実のルールが適用されない事象に直面すると、やはり私は混乱してしまう。私は思想の中で誰かに刺されたのだろうか？誰かの思想が現実的な力を持ち、行使されたのだろうか。

私はもう一度首を振った。

わからない、と私は思った。

私、なくてはならないもの（後）

そしてもう一つ、私には考えるべきことがある。私を刺した男についてだ。あの場面を思い出したくはない。でもしつかり記憶をたどらなきゃいけない。思い出しておく必要がある。

頭が鈍く痛む。無意識が私を守ろうとしているのかもしれない。もしかしたら私は思い出すべきじゃないのかもしれない。

私は目を閉じて深呼吸をした。

それでも知らなきゃいけない、と私は心の中で反復した。私はもう一度ゆっくりと息をはいて、自らを記憶の中の展望台へと導いた。

私は刺されて地面に倒れ込んだ。胸を見ると血が流れ出ている。喉から呼吸とも言葉ともれない空気が流れ出る。視界の端が次第にぼやけてくるなかで、何とか犯人の顔を見なければと顔を上げる。徐々に狭まってくる視界の中央に、血の滴るナイフをもつ男が立っている。私は意識を集中する。鼻筋が通っている。目は二重だ。特に特徴はないけれどハンサムな顔だ。しっかりとした顎をしている。体つきもいい。学生時代に、運動部に所属していた体だ。いや、彼は実際に運動部に所属していたのだ。私は彼がハンドボール部に所属していたことを知っている。彼が笑顔で映っている写真をよく覚えていて。幸せそうに、ピースサインをカメラに向かってしている。彼。そして、その隣に映っている女性を私はもつとよく知っている。とゆうか、誰よりもよく知っているといったいいかもしれない。彼はナオコの横で幸せそうに笑っていた。それはナオコが私に最初に見せてくれた彼氏とのツーショットだった。自慢げに写真を見せていた。

コウだ。

間違いない、私を刺したのはコウだ。

目を開けた時、世界が歪んでいた。そこはすでにさっきまで私がいた病室ではなかった。表層的には変わらない。硬いベッド、無機質な窓、無愛想な壁。全ては同じだ。でも私の全細胞が私に告げていた。

何かが起こっている。私の周りで何かが入れ替わってしまったのだ。

ナオコに会いにいかなきゃいけない。今すぐに。今ならまだ終電に間に合うはずだ。

私は誰にも言わずに病院をでた。

私、かならずどこかに（１）

私が駅に着いた時にはもう東京行きの特急電車は終わっていた。駅員は申し訳なさそうに、翌日の始発の時間を教えてくれたが、私はどうしても一晩何もせずに過ごす気にはなれなかった。不満そうな顔をしている私を見た駅員は、寝台列車ならあと３０分後に出発するものがあると教えてくれた。私が話せないことに気づくと、いつそう申し訳なさそうな声で、すいません、と言った。

私は寝台列車のチケットをすぐに購入した。

プラットフォームにはほとんど人気はなかった。学生らしい男がベンチに座って、コーヒーを飲んでいる。南極に取り残された男が必死で残り一つのホツカイロにしがみつくように、大切そうにコーヒーを抱えていた。私はその男から少し離れた場所にある柱に寄りかかって、ポケットから携帯を取り出した。やはり母には言うておくべきだろう。といっても、声が出ない状況では無言電話に終わってしまうためメールで伝えるしかないのだが。

母はかんかんになって怒るだろう。でももうどうしようもない。私はここにいるし、なんとしてもナオコに会いに東京に行く。

携帯はすでに充電が切れてしまっていた。ボタンを押しても、ただ黒い画面が静かに私をにらんでいるだけだった。考えてみれば、昨日の夜から充電していない。結婚式に出かける前に充電したきりだ。もちろん充電器もない。会ったとしても深夜のプラットホームで充電なんてできる訳がない。私は公衆電話を探して家に電話をかけようかと迷ったけれど、結局やめてしまった。しかたない。今かけるのも、明日の朝かけるのも、たいした違いはない。ナオコにも連絡できないけど、彼女の家はわかっているし、大丈夫だろう。

私は携帯をカバンに放り込んで、電車がくるまでの時間を柱の影で震えながら静かに待った。

電車は控えめに言つてとてもすいていた。車両にはまばらに3人が座っていた。みんなうつむき加減で、これからあの世に向かう魂の団のようだ。電車は、一瞬金属がきしむような音を出した後で静かに滑り出した。いくつかの夜光灯が白く灯しだす富山駅が徐々に小さくなっていく。車内同様に車外にも無音の世界が広がっているような気がした。雪がすべての音を包み込んで消してしまったようだった。

私はシートを大きく後ろに倒し、座席においてあったブランケットを顎の下まで持ち上げた。眠れないと心配していたのが、嘘のように強烈な眠気が私を眠りの中へと引きずりこんだ。

短い夢の中で、私は魂の団の一員となっていた。厳かな気持ちで、あの世へと向かう列車に静かに揺られていた。ただ、私は悲しくはなかった。なぜならそこにはナオコがいるとわかっていたから彼女は私を待っているのだ。やがて顔のない車掌らしき男がやって来て、私に切符を見せろといった。もちろん、その男に口はない。だから、実際に音を発した訳ではない。でも、確かにそういったように私には聞こえた。切符はないと私は答えた。残念ながら、切符を買ったような記憶はないし、だいたい自分がいつからこの列車に乗っているかも覚えていない。しかし、顔のない車掌はもう一度、切符を見せろと無音に言った。切符はない、と私は繰り返した。そうすると、顔のない男は、それまでなかったはずの口を大きく開いた。何の予兆もなく、何もなかった場所が、ぱくりと割れて口になつてしまったのだ。そしてその口しかない男は、金属音のような高い奇声をあげ始めた。頭が割れてしまうかと思うほどに不快な音だった。やがてそれまで顔をうなだれていた乗客たちが顔をあげてこちらを見た。彼らは車掌と同じように、顔のない人々だった。彼らは、存在しない目で私に軽蔑の視線を向けていた。

「まもなく大宮駅に到着します。お忘れ物のないようにご準備ください」という車内アナウンスで私は目を覚ました。

私、かならずどこかに(2)

「まもなく大宮駅に到着します。おおりになるお客様はお忘れ物のないようにご準備ください」という車内アナウンスで私は目を覚ました。私は不安になってあたりを見回してみたけれど、口だけの車掌や、顔のない魂はもちろんいなかった。顔のある人々が、忙しそうに荷物をまとめていた。

朝の大宮駅は昨夜の富山駅とは打って変わって人で溢れていた。とてもじゃないけれど同じ世界の風景には見えない。人々は地獄から抜け出すための最終列車に乗り込むような形相ですでに満員の電車に乗り込んでいく。五分後には次の電車があるというのに。

とてもじゃないけれど、そんな電車に乗りたとは思わなかった。でカフエを探して朝食をとることにした。時間はある。急いで地獄から抜け出す必要はない。ナオコはどうせ会社に言っているはずだ。携帯の充電器がないのでメールはできないし。電話はかけられない。結局は彼女が帰宅するまで待つしかない。合鍵がポストに入っていることを私は聞いているし、ポストの暗証番号も知っている。ナオコが教えてくれた。何かあればいつでも鍵は使っているからねと言われている。でも待ったほうがよさそうな気がした。彼女を驚かせたくはない。

ちょうど改札をでた所にスターバックスが見えた。駅の改札前の広場を見下ろす絶好の位置だったので、私はエスカレーターで上に行くことにした。ホットサンドとコーヒーを頼んで、窓際のカウンター席に座った。大きな窓が広場を見下ろすように広がっていて、下を歩く人々がよく見えた。そこから見ると、人の流れがよくわかる。いくつかある駅の出入り口から改札へと向かい、大きな流れができていた。それはよくみると川の流れのようにも見えたし、ありの成群のようにも見えた。

私はそんなせくせくと歩く人々を上から見下ろしながらコーヒを飲んだ。そして彼ら、彼女らがこれから送ろうとしている様々な種類の一日を想像してみた。あその男性は何かとんでもないミスをして上司に怒られるかもしれない。あの高そうな鞆を持った男性は部下に食事をごちそうするかもしれない。赤いコート的女性は旦那に内緒で会社の同僚とラブホテルに行くかもしれないし、あその学生は今日処女を失うかもしれない。今晚プロポーズをするために予約を取っている男もいるかもしれない。そう考えると、そこをあるいている人々の全てが、自分の過去、現在、未来のすべての可能性のプロジェクションであつてもよい気がして来た。そうだったかもしれない自分。そうであるかもしれない自分。そうなるかもしれない自分。そんないろいろなバージョンの自分たちが、今眼下を早足に歩いている。それらの自分たちの中から、今ここでコーヒを飲んでいる自分を選んだ理由はなんなのだろうか？一体何が私に今の自分をそれらの無限の可能性の中から選びとらせたのだろうか？

私、かならずどこかに(3)

私は朝食を終えるとネットカフェの看板を探した。最初に目についた店に入り、そこで母の携帯宛にメールをした。ナオコに会いに行くことにしたの、大丈夫だから心配しないで。とだけ簡単に伝えた。ナオコの携帯にもメールできたらよい、残念ながら彼女のアドレスを空では覚えていなかった。

特に何もすることがないので、設定時間の3時間がくるまで漫画を読んで過ごした。ちょうど子供の頃に読んだ覚えのある懐かしい漫画が棚にらんでいるのが見えたからだ。

時間がくると退出して、あてもなく大宮駅周辺を散策した。お腹が空いた頃に時計を見てみると時刻は午後1時半を少し回ったところだった。私はおしゃれそうな看板を出していたイタリアンレストランに入りゆつくりと昼食をとった。その間、不思議と言葉が話せないことが不自由でないことを考えていた。昨日の駅にしても、今日の朝のスターバックスも、そしてネットカフェでも、私は一言も話していない。ディスプレイを指差したり、カウンターの上の料金表を指差すだけで、全ては円滑に進んでいった。問題なく、ホットサンドを注文できたし、3時間パックも注文できた。対応したレジの人々は私が話せないこさえ気づいていないようだった。そう考えるとなんだかおかしくなった。人々は話を聞いているようで、何も聞いていないのだ。

その時私は気づいた。

どうしてナオコは私にこんなに長い間連絡をしてこないんだろう？

母の癌の知らせ以来、私は自分のことばかりに気を取られていた。私が必要としている時に、ナオコの返信がないことに腹だつてたこともあった。でもよく考えてみれば、私はナオコが連絡してこないことをただ不満に思っただけで、それが何か異変の現れであるとは考えてこなかった。彼女に何かが起こって、それが理由で

しばらくの間連絡がない可能性だってある。いやその可能性は高い。考えれば考えるほどに、そうとしか思えなくなってきた。コウが私の前に現れた昨晚の出来事にしあって、私をここに導くためのメッセージだったのではないだろうか？すこし飛びはねてしまっている話のようにも聞こえるが、私の中にはすでに確信のようなものが芽生えてきていた。そうだ、声をなくしたことにしても、私にそのことを気づかせるためだったのではないだろうか。そう考えるとつじつまが合う気がした。私の無意識だか何かが私にメッセージを送っていたのかもしれない。

そう考えるとしても立つてもいられなくなった。どうして今まで気づかなかったのだろうか？胸の中で不安が膨れ上がり、心臓を圧迫していた。それと同時に自分に対する怒りが頭を支配した。

すぐにナオコのマンションに向かうことにした。デザートなんて食べている場合じゃない。行かなきゃいけない。

大宮駅からナオコの家までは一度だけ電車を乗り換えて20分程度の道のりだ。でもその20分は永遠に終わらないかと思うほどに長く感じられた。扁平に引き延ばされた時間の上を進んでいるようにいつまでたっても時計の針は進まなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9245m/>

僕と私。

2011年1月5日19時25分発行